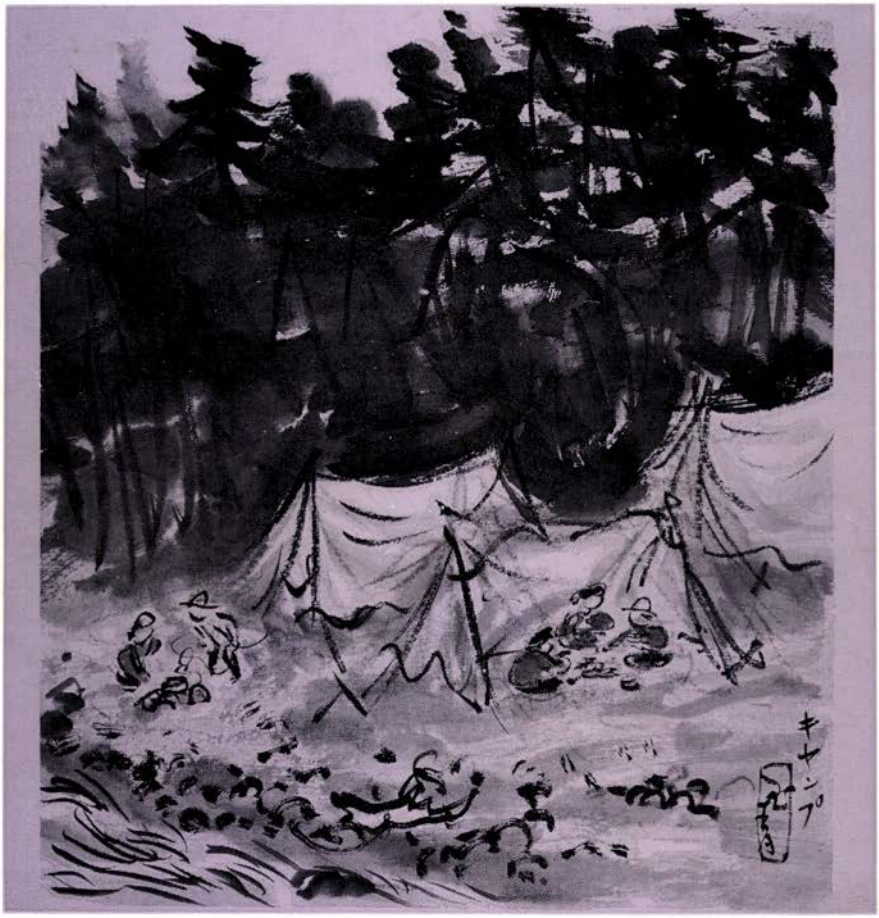
川柳塔

昭和五十年六月二十五日　印刷
昭和五十年七月一日発行　（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻五七八号



日川協加盟

No. 578

特集・活字になった処女作

七月号

えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛

超特撰
（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、八〇〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

HORAI

551
蓬莱商品の目印

アイスキャンデー

あずき・パイン・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ

蓬莱
大阪・なんば

《出張販売》高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

思い出がしきり結論の邪魔になり

何故の反骨虚しくなるばかり

瞳でわびてあしたの風をずるく待ち

母居まさずその母の声あたたかく

豪華な墓石すばらしい眺めに向けて建ち

中島生々庵

さとかえり

墓参のため九州の佐賀に帰省した。5月は母の忌の月で何んとか都合つけて毎年帰省するが、今年は伯母の新墓地にも詣りたくて博多にも下車した。市営の霊園は博多湾を一望という丘の中腹、立ちならぶ墓は皆豪華な霊園であった。たまたま車中で読んだ大法輪六月号に寺内大吉氏がお墓のことを書いておられた。墓地というものは作るものでなく、墓を守り又遺族自身をも守るべきものだと書いてあった。伯母の生涯を考えながら、この聖と寂とをいつまでも守りつづけたいものとぬかずいた次第である。私の帰省の理由に今一つある。小学校の同級生が集って一夕を楽しく持つ会を10年以上続けている。明治38年に小学校に入学したというので三八会と呼ぶのだが、もうすぐ80才に手が届く連中、私の老妻も特別会員として参加を許され、お国訛り丸出しの賑やかさ。散会の時は「さよなら」と言わず「又来年ね」と挨拶をするジィさまバアさまである。

座右の句

俺に似よ　俺に似るなと子を思い　（路郎）

私の句

育つもの育てるものか木も人も

川村好郎

川柳塔七月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

さとかえり……中島生々庵……（1）
夢……北川春巣……（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（六）
清鈴木博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……西尾栞選……（4）
水煙抄……菊沢小松園選……（30）
麻生路郎物語……（7）……東野大八……（23）
秀句鑑賞……（同人吟）……正本水客……（28）
……（水煙抄）……谷垣史好……（29）
私信……河野春三……（46）
近作……堀口塊人……諸家……（27）
百人一首と川柳……（13）……冨士野鞍馬……（38）
愛染帖……橘高薫風選……（40）

夢

北川春巣

往来で夢を見ている男にて　路郎

夢とは何であるか？　夢を知らぬ人はおそらく一人もあるまい。しかし日常生活の多忙に取り紛れて、平素は夢などということは忘れてしまっているのが普通であろう。

私自身もご多分にもれなかったのだが、夢に注意を向けだしたのは、フロイトの精神分析学を勉強しだしてからのことで、それでももう二十数年になる。フロイトの精神分析の中に「夢判断」があることはご存知のことと思う。現在フロイトの説は全面的に学界から承認されたわけではないが、彼が学界の研究を促進させたことは確かである。

夢というのは、(1)睡眠中に現実のように種種の事柄を経験し、目が覚めてからそれを思い出す現象である。これはご承知のように、まことに取留めがなく、たよりないもので、「夢」ということばで、(2)はかないこと、頼みにならぬこと、という意味を表わし、またそこから、(3)迷い、という意味も派生した。夢はまたフロイトの説では「願望の実現」である、ということから、(4)希望、という意味にも使われる。句の中で「夢」ということばが

路郎先生の思い出……八木摩天郎…（37）
活字になった処女作……（同人特集）……（42）
無鬼・丁路・没食子・雀踊子・摩天郎・水車・潮花・紫香・
文庫・茶仏・思月・日満・祥月・喜由・古方・一三夫
嗚呼　永尾英断……小西無鬼…（48）
西成詩人章雅氏逝く……不二田一三夫…（49）
一分間の柳論……河原みのる…（51）
雅号ぶっちやけばなし……渡辺暁童…（62）
女シリーズ……菊沢小松園…（47）
大阪・山陰交流隠岐吟行……吉岡逓児…（50）
初歩教室……本田恵二朗…（54）
大萬川柳「花瓶」……川村好郎選…（56）
柳界展望……（58）
本社六月句会……（庸佑・整理）…（60）
各地柳壇（佳句地10選）……小砂白汀…（65）
一路集「夏祭り」……福浦勝晴選…（52）
「少年」……奥谷弘朗選…（52）
「うなぎ」……小西無鬼選…（53）
編集後記……（一三夫・葉子）…（69）

座右の句

寝ころべば畳一帖ふさぐのみ　（路郎）

私の句

袈裟ころも脱げば毛脛の凡夫なり

若本多久志

使われている場合、以上のうちのどの意味で使われているか、ということを考えるのは、句の解釈や鑑賞にも必要であり、また興味あることでもある。

頭書の路郎先生の句の「夢」も、右の夢の意味のどれかに当ると思うのだが、目を覚ましていながら（往来で）夢を見ているところに、この男の特異な所があって、それで句になったのだろう、と私は思うのである。

夢を見よすばらしい夢を無税だよ　豆秋

夢に「よい夢」と「悪い夢」とがある。「一富士、二鷹、三茄子」が「よい夢」の代表のようにいわれ、初夢を見るには宝船の絵を布団の下に敷いて寝るとよい、などの云い伝えがあるが、現在では信じる人はない。「悪い夢」とはどんな夢か。「一富士…」のような格言もなく、きまった定義もないが、これは獏に食べさせればよいことになっている。

色のついた夢は「よい夢」だ、とどこかで読んだ記憶が頭の隅にあって、手術後、実際に色の夢を見たので、私は喜こんでそれを句に作った。ところが最近読んだ本によれば、色彩夢は生理的にも二〇%ぐらいは見るものらしい。それは特異なものではなく、従って「よい夢」ともいえぬとのこと。迷信とは思っていたものの、私はいささかがっかりした。

麻酔さめかけて夢にも色があり　春巣

川柳塔

西尾栞選

藤井寺市　西　いわを

片方はアクセサリーの腕となる
道祖神おおらかなもの抱き合うて
砂の塔少年の瞳に崩れ行く
浜木綿の葉の重なりは情熱よ
ひっそりと土塀の道は花明り
行列を崩さず羊歯は列ぶもの

母の日

母と云う音韻に響くもの

大阪市　不二田一三夫

テニオハがどこか違うてる夫婦(めおと)みち
いたずらっ子のように鉢から新芽出る
告別式花街(いろまち)も来て見直され
日ソ漁業カニの親子の生き別れ
女王さまへ未熟なストも見てもらい

寄　席

平和ラッパ師（66）肝硬変で死去（50・5・2）

天王寺の亀の池でな……鐘と消え

兵庫県　遠山可住

だまされてはりまんねんと値引きせず
女の直感へ落着いてみるほかはなし
手ぶらで帰る男が勿体ない女
その裏を探るこころを淋しがり
ごめんごめんと冷えきっている妻の足
木目込人形かくて女に仕上げられ

神戸市　中村ゆきを

働いた手には手相などいらず
地下鉄が通りまっせと周旋屋
人形のような顔して嘘をつき
丈夫な歯してて歯医者を悪くいう
小姑仲のよいのに気がつまり
人の眼に指をつつ込む記事で売り

香川県　三井酔夢

花譜満ちて五月讃歌の詩を綴る
花神との出あい人より欺かず
誇り高き花王が語る恋絵巻

情けなどいらぬと牡丹火と燃える
激情の果てははかなし花の心
レクイエムはらはら散るは白牡丹

富田林市　岩田美代

捨てゼリフ残して雲の走り見る
春愁や分別こうもわずらわし
常識が出たばっかりに失いし
人間らしい悩みを聞いて救われる
水いらずふと意地悪がしたくなり
倖せらし声に白髪も生えてない

八尾市　高橋夕花

髪を梳く女いのちの火を燃やす
偽わらぬ女の胸に塔築く
女とはたった一つの愛に閉ず
直線を歩けば聞える嗤い声
一輪の薔薇の重さに眠られず
黒髪も五月の風に素直なり

泉大津市　村上春巳

雄リスが彼女をかばう構えする
点線をひけば女の胸に着き
馬鹿だなあーなんて言葉で惚れている
にんにくの匂い神戸の二日酔
信楽の狸の個性を探してる
無事終えた幹事同士の縄のれん

島根県　錦織文子

怒ったら駄目　血圧のささやき
留守居の嬉しさ何しよう　そんな日も
ほがらかに生きる笑顔を夫にあげ
注射打ち打ち暮しの靴をはく
再会のうずきをレモン知っている
糸切歯邪心プッツリ切って欲し

八尾市　高杉鬼遊

開幕のベル貴婦人は慌てない
社長来る掃いたところを掃いている
職安でどういばっても失業者
一日の往き来　異性を眼で犯す
夾竹桃花に変わりはなけれども
ピカソの絵泣くだけ泣けと画いてある

小松市　伊藤茶仏

春の叙勲

何よりも夫婦達者でいる叙勲
抜けがらの胸に輝やく旭五等
いたらない俺にはすぎた姥桜
春秋の間に二度までもきた夫婦
古稀はよし春の叙勲に名をつらね

大阪市　吉田圭井堂

荒瀬さえのぼれぬ鯉に育てあげ
憲法も変えたしこのままでも居たし
野党とはあげ足取りの代名詞
大国の谷間で日本呼吸を詰め

なさけなや茄子の色さえ着けた色

大阪市　本多柳志

素通りをした友情を誤解され
悲しみをあらわに喪服美しし
千載一遇という遇然にまだ会わず

隠岐吟行

放牧の馬に孤独の気が和み
目の下に日本海がある朝餉

倉敷市　水粉千翁

よく似てる愚痴を並べて親おもい
ふくらんでつぼみの野心だというか
群衆になって右手をあげただけ
笑えない話へ私を置いてみる
七色の明日へわたしの白を撰る

倉敷市　野田素身郎

メーキャップ母からマダムの顔となる
電話口ステテコだけでかしこまり
心配を余所に子供の一人旅
交通スト紫雲英咲く道出勤す
子のなぞなぞへわざと間違え

青森市　工藤甲吉

陶然となればこの世も捨て難し
紅顔のやがて羽ばたく美しさ
要求がまだ通らない結跏趺坐
また亡妻のつけたボタンが一つ落ち

落椿浄土のひとへふりかかり

八尾市　香川酔々

竹とんぼ削る男に過去の夢
幻燈のように地下鉄駅が見え
滴りは磨崖仏の線を彫り
新しい神話はじまるモンロー忌
ある日ふと女が嫌になるおんな

宝塚市　傍島静馬

あなたのわたし云うてた面影何処へいた
がたがたになって精出す一万歩
有難や涅槃の境で聞く法話
恐るおそる値切ればあっさり負けてくれ
集金へ養子ええとこ見せられず

岸和田市　高橋操子

胸を打つその一行の旅便り
合掌をすればやさしくなる呼吸
吸い置きの出来ぬきれいな山と川
山川がきれい住む人まできれい
使う事あるからためた金楽し

西宮市　若林草右

春の目ざめ木にも遅速のある嫩
かげ見せぬ朝の野鳥にある不安
健康は晩のおかずを訊いている
女王もストには勝てぬ空の旅
塗りかえた地図は血の色肉の色

兵庫県　小西無鬼

急行待ちす急行で帰って来
須磨明石鈍行列車の方がよし
老いらくの余生蝦夷までハワイまで
ボロクソに壊したブルの体当り
ミゼラブル　ガチャンと切れた赤電話

八尾市　宮西弥生

春の雪きびしき面抱くごとく
身の軽い女の噂に火がつかず
事欠かぬ腕もつ女に燃ゆるもの
騙されてあげる階段ゆく喜劇
白い日記埋める女がいてくれる

名古屋市　吉田水車

女王さまへせめて富士なと晴れてくれ
風邪かと言えば咳で答える
競馬帰えり屋台の酒となりにけり
急行がまた特急に追い越され
生きのびて何をかこたん葱坊主

大阪市　山川阿茶

ゆるせよ鼠癌細胞を植え
人工腎人工脳もあって欲し
医者やめて注射も薬も怖くなり
宮中も見せてくれはるカラーテレビ

寺子屋

前帯の千代が涙のいろは唄

米子市　八木千代

凡人一路人並ほどの子へ育て
スリッパを跳ばし朗報やって来る
茶の間の灯　一途に老いて疑わず
なたね梅雨　読経の老母の膝に冷え
制服の孫の育ちをふと恐れ

貝塚市　野坂つき子

マイペース春のペタルは焦らない
豪快に笑えばうっぷん逃げてゆき
家中を欺ましスリルに酔うている
場違いな女ひとりに喰われてる
フィーリング良いはずなのに振り向かず

松原市　谷垣史好

男はんに云えん病気があるのなり
雨だれを黙って聞いている破局
あの人にこんな趣味あり社内報
音楽堂五月の風の美わしき
六月の今日も重たきカレンダー

新宮市　大矢十郎

会釈しておく此の人は高利貸し
号令も平和御起立願います
正直へ嘘を言わせる土地相場
返書直ぐ出さず遅なったで出さず
落選の其の後候補の顔を見ず

岡山県　嘉数千代香

明治の火　母は種火として護り
花時計職をなくした愚痴も聞き
うぬぼれた心を刺したバラの棘
わたくしへ戻るこころへ花を活け
神話の中の謎を犯していく文化

大阪市　西出一栄

落ち椿避けて通りし墓の道
腰のしてアクロバットの鯉見上ぐ
長生きしてやと小遣い当てにされ
暁を知らぬ春眠朝餉抜く
根本的矛盾に耐えて来た庶民

桜井市　岩本雀踊子

下積みの都会で抜けぬ国訛
朝配る少年朝の街が好き
妻の手の中でまるくなる凡夫
暮しからはみ出しそうな二男二女
夏の陽を嫌うとなまけ者にされ

大阪市　川口弘生

腹の虫に恥の上塗りさせられる
橋の下に涙の好きな人魚住む
何時の間か安全牌になって居た
犯人のように妊婦に連れられて
癒ったらカレーが食べたい胃潰瘍

神戸市　小浜牧人

旅先きの思い出が鳴る鈴を買う
島滅ぶ日の幻想海蝕の奇景観る
離れ島人が恋しい風が吹く
変化球男心に火を注ぐ
武者人形この子にかける夢飾る

大阪市　金井文秋

体を案じられて不安になってくる
感覚で描いた子の絵に教えられ
冗談も云えぬ空気がのしかかり
変哲もなくサボテンが育つなり
さあ雨だよと植木鉢出してやり

大阪市　小出智子

春夏秋冬この街角の花の彩
グループにいる気安さによく笑う
喜怒哀楽の怒りと云う字を消しました
古い女のあまえをゆるす古都の雨
友達の指輪をやっぱり見てしまう

大阪市　河野君子

真鯉緋鯉世の習わしに逆わず
生きてゆく証しのペンが濡れる日も
説いた子に自画像青く塗られたり
藤の花こよなく揺れて恋ごころ
糸切って風船迷わず風の中

東京都　山根白星

策尽きて風に押される歩きよう
高砂やあすの喪に同じモーニング

端の歩を恋の打診について置く
流れ矢に当る刹那の高笑い
読み直し読む行間の愛の文字

松江市　吉岡遞児

どちらともとれる答弁して総理
目ざしぐらい焼けると女房出してやり
コマーシャル中でした田淵のホームラン
天使では食えず白衣のストライキ
頬杖にすがる思策を迷と言う

島根県　堀江正朗

妻がいる酔うた頭の片隅に
妻の愚痴酔うて寝る夜の子守唄
遠い耳妻の愚痴だけよう聞こえ
そこまでの道が嬉しい妻と佇ち
大切な目を閉じたまま音のなか

島根県　堀江芳子

慰め合うておかしなおかしな日が暮れた
これからのつきあい心臓さん頼みます
五月晴れ持病忘れて透きとおる
道細く見えても同じ幅を持ち
夢のなかでも心臓走らしてくれぬ

竹原市　山内静水

お言葉に甘え狂って来たリズム
自然の調べ妙なる草むしり
美わしの五月フィナーレの音色

ママさんの目に止り木の父子
ふり向けばそろそろ歩いてほしい妻

松江市　小林孤呂二

四十九そろそろ野望の芽を摘もう
淋しくもあり妻が歯医者へ通う日は
修学旅行部屋の高さを嬉しがり
花の中年などと煽てに乗る酒場
咲きそろう杜若へ雨のほしい景

松江市　柳楽鶴丸

宍道湖の夜景が消えた袖子町
予科練の歌なつかしい花の山
推センの言葉男のほれる男です
平社員一生「忍」の文字を抱き
拾った命で思い切り生きている

竹原市　三宅不朽

癒え遅々とアスパラガスの揺れやまず
ひとの訃へキリリと眉をひく女患
藤に佇つ喪服すみずみまで女
反古伸ばす孤老その掌を撫るかに
獅子舞いに噛まれてみたいのも四十

堺市　山本素郎

みどりは緑のほとりより匂う
娘の酌に星座は夏にめぐらんと
しかられてきた子が駈ける虹の橋
張りぼての虎が自画像にも見えて

みずからを裁くに似たり流れ星

東大阪市　竹中肖二

答弁をぼかす数字を並べ立て
踊り子へあわくはかない恋をする
さからえば母の淋しい瞳に出会う
ビル谷間　緑の宮に来る野鳥
中空へ火花散らしてビルが建つ

東大阪市　竹中綾女

母の紋つけた調度にある誇り
恍惚に仕え五十でまだ娘
実母より長く暮した母恋し
亡母の星強く生きよと合図する
愛の絆この世を豊かな物にする

岡山県　横山一声

雨の降る予報だけがよく当り
いたわりの心忘れる程達者
二度返事したのが少しかんにふれ
団地妻ひるのドラマにひとり燃え
滝に落ち岩にくだけて水が澄み

大阪市　宮尾あいき

善光寺観光バスの旅

新緑の信濃路絵であり詩であり
お七可愛や吉三建立濡れ仏
戒壇は冥途の手さぐり足さぐり
お寺商法大阪商人驚かせ

紫に匂う式部の御直筆

米子市　林瑞枝

贈られてあなたの母である誇り
切符売る機械は対話のない運命
チャンスもう勇なき人へ振り向かず
心澄む耳は声なき声を聞き
事務的なリモコン人事にある不服

倉敷市　松下梁水

歯車の欠けも庇うて夫婦です
片隅の美談に心洗われる
無我の境妻はドラマの中に居る
潮騒へ自問自答の詩を綴り
冷酷な言葉に秘める愛の鞭

島根県　小砂白汀

山芋の素直すぎるは疑われ
ご不幸を告げて有線曲をかけ
あまり喋らないから善人に見える
パズル解く側でこのまま了わるのか
ぬるま湯もときに蒸発したかろう

富田林市　和田維久子

教え子と再会一句

手こずった児に会い遠い日の会話
嘘のない馬鹿正直になってみる
疑問符のままでここまで来た夫婦
今のうち今のうちとて旅に出る

花の霊見れども見えず咲き狂う

大阪市　中川滋雀

人生の折り目をこの手で握りしめ
去るものは追わず日記の人となり
追いつめて空しさだけが手に残り
雲はゆくその日その日の風にのり
味噌汁の湯気にほぐれた朝の距離

鳥取市　河村日満

メーデーのニュースもいつか他人の瞳
人事異動に陳情背負い投げをくい
わが家でも背広虚勢を崩さない
病人に春が春がの季節もすぎ
喰べられるうちはと医者に保証され

八尾市　大路美幸

立場だけ固守して言葉角になる
薄氷を踏む幸福と知らず生き
コーヒーが苦い別れの朝は雨
女王はおんなで華麗なるドラマ
しんがりを歩いて母に悔いはない

西宮市　島居百酒

斗病の子を忘れさす酒に馴れ
身内皆揃うて故里を語る酒
レイオフで一年の計狂いだし
もう帰る舟足を待つ岬の灯
取立てのように速達で来た無心

倉吉市　奥谷弘朗

原因は仕事に自信のない無口
生甲斐と力んで見せるものが無い
気疲れをほぐしてくれる妻がいる
エリザベス女王の帽子がお気に召し
若き日の夢満たされぬままに老い

鳥取県　鈴木村諷子

達観とボケとのどこか類似点
日本沈没日本爆発日本スト
お母さんわたしの好きな言葉です
霊柩車軒先までも迎えに来
死んだので寄ってたかって褒めに来る

大和郡山市　森田カズエ

ノックして入ってくれと子に云われ
過去云わぬ女のメモにある斜線
約束の数きっちりに肩叩く
もっともらしい顔で投票すましてき
遮断機が降りて闘志を湧きたたせ

長谷寺ぼたん観賞二句

大ぼたん迷わずカメラの位置決める
浄土とは此処かとぼたんの中に立ち
連休へ留守番という役があり
二回目の停年五月の陽がまぶい
わが過去にペンキ塗りたい個所があり

和歌山市　津田与史

浮き沈みある人生の花暦
独楽の芯少し狂うている素振
迷彩へ塗るカラフルな色である
復元もならず女の化粧代
裏門をたたけば金の音がする

倉敷市　小幡里風

招かざる老人よろよろ前に立ち
好物とさよなら今日も歯科通い
地下勤務地上の光へ大クシャミ
老人も定期券は居合抜き
別嬪が降りて野郎が来る座席

大阪市　神田秀峰

あきらめて虚飾を脱いだ日の軽さ
気分屋の妻が今日はハイハイハイ
口喧嘩　勝った余韻を泣く女
黙認の形でこわごわ許す恋
一向にお世辞通じぬ憎い顔

倉敷市　稲田豊作

ほほえみをベールの距離が暖める
善意には善意でかえる趣味仲間
前進もせぬにブレーキだけ覚え
ほろ酔いを五月の風は詩人にし
連休へ不況の波がうろたえる

大阪市　津守柳信

よく見れば僕は数からはずれてる
老婆日向ぼこアンズの花が散り始め
出稼ぎの飯場の窓に春の風
コンピューター僕も数値の一人なり
受けて立つ意見素直に聞いておく

高槻市　山田季賛

夏が来て山の男に逢える雲
あの峰に墓標を建てるという噂
駅前に雪やけの髭二、三人
雪解けの水で真夏の汗を拭く
峰に待つ雪は小さなみどり抱く

富田林市　板尾岳人

ストレス解消ひねもす花と語らいぬ
末席のポソリ一と言落着す
真実は真実誤解の日々に耐えるのみ
好結果生まれて反則咎めない

倉敷市　藤井春日

古稀も依然と　酒のしくじり
始発へ乗せる　髪をいたわる
月の動きの　早い冬空
海の小じわは　春を吹く風

愛媛県　渡辺暁童

メロドラマ終れば現実待っている
群衆の中で個性が消えている
海は母で波はやさしいリズム持つ

三重県　川上大輪

夕焼けへ民話が一つ甦える

大阪市　室谷徹舟

落選のポスター笑った儘残り
片言を云う孫総べて忘れさせ
娘の寝顔親と云う字を胸に書く
病院の事情に詳しお年寄り

倉敷市　能登原白水

美しい和解脱線して決り
氷解の父の真価に触れて恥じ
幼年の恩を忘れぬ羽根布団
我が首の裏は見えない独り言

大阪市　天正千梢

はなやぐ肉体を持ちこわさなど知らず
眼配りは大家の域に到達し
都の泥を白足袋につけて挨拶し
そこに坐って自分を築く事に油断せず

和歌山市　沢山福水

レントゲンまた古傷を探し当て
川涸れて人は挽歌を繰り返し
あした咲く花あり仏さまへ切る
ブランコを降せば馬を押せと言う

高槻市　若柳潮花

金にもの言わせ名取りの披露する
春の雨ぼたんの色を砂が吸う
親と子に水よりうすい血も流れ

盃を逃げる妓は三味へ立ち

鳥取市　両川洋々

だます気の誤算だませぬ人に会い
手並み狂った料理は母が食べ
不器用に触れず手の豆いたわられ
男三十弱者の列で旗を振り

姫路市　梅谿庵不酔

顔色と眼つきで刑事調書取り
お姑は吉良様に似てお意地悪
留年を逃がれりゃ予備校待っている
もう言うな言うな言うなと仲に入り

伊丹市　小川静観堂

減ってゆく明治の人や蔣介石
影絵のような富士を左に旅の窓
いのち短かしさくらさくら
三分五分などと言わず花満開

氷見市　関美子

蟻の日々地の熱さなど口にせず
虫干しの娘に敗戦服を説き
妬ましいから白痴美と評しとき
陰花植物のごと深夜聞くDJ

尼崎市　高津徹也

吹きすぎる風を見送る一人っ子
落とし穴を手をつないで跳び越える
大文字とまどいながら焼け始め

情報が孤独の中で膨脹し

鳥取県　清水一保

選挙すみ元の平和な隣組
連休の留守も祖父母の心良く
つつじ展花の言葉を人知らず
自転する地球へ待ったの声空し

大田市　藤田軒太楼

愛鳥の殖える鳩にも困り果て
一生の不作と云い合い年重ね
噛みしめて見給えこよなき味が出る
石仏の輝く若葉に目を細め

松江市　岡崎祥月

八百杉と対話昔の夢語る
子供の日親も子供になって見る
大型連休ゴミをみやげにおいて去り
知性持つ妻で同んなじ趣味に生き

岡山県　池田古心

叱る娘が居るから老いの倖な
鼻血すら出ない生活で恋をする
素直には打てぬ脈搏手を取られ
ストレスの解消諍いして夫婦

美祢市　安平次弘道

埋蔵金の地図人生を狂わせる
鳩と語る時少年の瞳が生きる
臨終へ医師には悔いることなきや

隠してたガンを見舞が来てしゃべり

柏原市　大峠可動

走らねば明日のルーレットが回る
泣くな弱虫母の一灯ある限り
夕焼けに詩があり中座して帰る
喝采を待つ夫婦愛の灯を点ける

松原市　玉置重人

五十坂ある日ある時ある焦り
クルマ買うバイトに一口乗せられる
シベリヤの根雪に青春埋めた過去
盛り場の隅でたこ焼生きる道

呉市　槇田英詩

受確か妻の唇妻の味
児の夢の砂場に父と母がいる
幕落ちと判ってからの荒い酒
短大を出て腰掛けの宮仕え

堺市　河股緑水

万分の一のチャンスに賭けてみる
見える眼も閉じて私の欲を捨て
旅遠し行かねばならぬ渡り鳥
妙法一乗院妙登日慈信女は妻の名

笠岡市　松本忠三

老婆を立たせて娘無表情
子供には見せまい会社での仕事
寝たきりの父へ曽孫の鯉幟り

値段を聞いてからおもむろに腹をきめ
和歌山市　野村太茂津

花の道やがて散る身へ若芽吹き
萠えだして無駄な枝にもある個性
変声期来たらしい発想もまた変り
人柄の円さへ丸く吸い込まれ
岸和田市　葛城伊三郎

いたずらを打った右手の力過ぎ
そう無気になりなさんなと御茶を入れ
控えてる口へ相手はたたみかけ
養老院昔自慢の白い髭
尼崎市　黒川紫香

三人で傘一本の道遠し
伸び上り孫の舞台を見て戻り
やけくその唄でおでんが煮えている
柳の芽宇治の流れは音をたて
諫早市　原田明春

汐干狩丘から見ればヒップ展
看護婦の親身を女房気に入らず
上役の癖も教えて引き継がれ
涙拭く所作にも女念を入れ
和歌山市　小川佐知子

娘を委す手を握る目が熱くなり
蹴った座に未練なしとは云い切れず
ファッションで飾り女に愛がない

別れても心に温み残す人
岡山県　竹内翁童

青春の友情利害のないぬくみ
言語障害か平和の歌うたえない
妻の不満はみそ汁の味を変え
よこしまなおもいのよぎるさびしきひ
堺市　高橋千万子

来年へもう葉ざくらの心意気
出たお茶が話をふっと変えさせる
お早ようとお休みきいて今日の幸
踏み出した一歩の今日を大切に
出雲市　原独仙

どちらでもいいと未練の残る顔
複雑な気持ち老人会へ入る
葬儀屋も先ずはお悔み述べてから
隠岐吟行会迎えて
大阪の温みが握る掌に移る
米子市　増田竹馬

お人柄だけど一と味物足らず
人柄を褒めて力量には触れず
うたた寝に手頃の高さ広辞苑
同じに育てたつもりユダ一人
橿原市　岩井本蔭棒

儲かっていても道具屋不愛想
ちらちらと妊婦の腹を刺す視線

熱弁は右も左も頷かせ
エレベーター嬢のほかには僕一人
今治市　原田一風

肩抱いて上げよう春の雨が降る
偏屈も居ると判った披露宴
ゆっくりと階段下りて良い気分
美容院筍食べた顔が来る
守口市　野呂右近

ルール違反したくもなるような美しさ
合掌の手からぬくもり満ちて来る
値踏みする声背に悠々錦鯉
いろは順では損をする姓を持ち
藤井寺市　児島与呂志

嘘の無い心に何をためらうか
七、八歩急いで乗ったで弾む息
としよりの匂いの部屋で本を読み
悼宗義さん
死に急ぐつもりで無かった碑がでかい
東大阪市　落合思月

倖せの頂点義理を欠きつづけ
歯に衣をきせない反骨頼られる
控え目に暮して近所に見くびられ
影法師お前も闇はきらいかい
玉野市　小谷仙山

どの色を塗っても六十爺くさい

食べるには何不自由無いのがストが出来
煙草一ぷくじっと耐えてる瞳のやり場
昔と今比べて小言の種にする
守口市　羽原静歩

お客様は神様ストはスト
坊さんの瞳に坊さんの空涙
未来図の構図そろそろぼろを出し
まちまちの意見を聞いて床柱
神戸市　仲どんたく

自序伝用苦労もしとけ若人よ
赤旗へ右翼は軍歌発射する
習いごとまさかの時へのまさか来る
春待たず又老人の逝く寒波
大洲市　堀内暁風

脇道にそれた話題に花が咲き
片手落ちしてから友と距離が出来
齢の差はハッキリ違う意見の差
ピタリ的中易者の云った過去のこと
大阪市　神谷凡九郎

古啓さん開店一句
日々を積むその花園の色模様
ちと早い定年が来た小休止
けったいな男失業したのは俺の筈
ハプニングプログラムにはない旅情
京都市　都倉求芽

腕まくりしても力瘤のない私
笑い声だけがここまで聞えて来

鳴呼英断さん

早口がもう聞かれない忽然と
天国へかける電話が欲しい夜

大阪市　黒田真砂

一点を凝視し思考は空転し
やんわりと値切って京の買い上手
不倖な友の手そっと握りしめ
云い過ぎを恥じて心に鍵かける

岸和田市　福浦勝晴

学窓を出ると企業の狭い門
キャンバスに失意の絵の具塗りたくり
終電車あしたはあしたの風が吹く
もうちょっと優雅に酒が飲めないか

大阪市　江城修史

たぎるもの抱いてさりげない別れ
巧まざる嘘へ合槌深くうち
信頼の歩巾崩れる日を想い
人生の起伏の中の会者定離

倉敷市　小野克枝

根性を見せてブロック塀に咲き
下手な唄聞いて順番楽になる
一線を引いて女の白い道
いい妻でありたい鏡拭き清め

大阪市　西川誓二

師も父母も同胞(はらから)もいる雲の峰
冷房の部屋で一日中無為無策
子が巣立てば今度は孫を当てがわれ
人は人鈍行が合うマイペース

岸和田市　植山武助

席譲る明日の自分が通り過ぎ
抽斗しの中に私の世は拓け
舅と云う言葉が嫌い嫁が来る
まだ子供ですよ八十の母が居る

京都市　松川杜的

悼む・英断

三度目の八十八カ所はおいづるで
ポケツに瓶あり三途の川青葉
極楽の何処に貼ろうか千社札
塔の影友の笑顔を消すまいぞ

今治市　越智一水

菜の花が天地明るいものにする
春炬燵平和な昼のゆめを見る
若者がかくから汗は美しい
世の流れのんびり生きて早いこと

堺市　伏見茂美

特売場我が妻ながら呼びもどし
投入れの明日は咲きましよこぼれ花
十七の海女も商う輪島市（能登旅行）

何処にでもあるのに輪島の箸みやげ
西宮市　藤村〆女

甘言に崩れると見せ席を蹴る
ともすれば崩れたい気の血に挑む
駅鈴の音色にほれた隠岐土産
騒音も無くて静かなストの朝
豊中市　戸田古方

旅の句二
島根県温泉津・浅草才市の完教詩を読んで

有難いと思えぬことが有難く
おれがおれがが地獄やおまへんか
みんな嘘懺悔するのも嘘らしく
びんぼうも宝であると思われて
平田市　久家代仕男

譲る座を心得て居て敵が無い
地球が冷え生活が冷え心まで
冷酷な世相だ笑い忘れまい
女王とておんな真珠へ輝ける
竹原市　森井菁居

正論にプライドがあり妥協せぬ
夫婦仲季節の花を絶やさない
ハイミスのおしゃれに世辞を言いそびれ

柳友M・F氏を悼む

会者定離ただ掌を合わせ掌を合わせ
和歌山市　若宮武雄

逆境のやみ美しく妻をみる
伸びるより曲らないよう子に祈り
駄馬の性尻叩かれてから動き
招かざる客のブザーはけたたまし
枚方市　宮川珠笑

草むしる汗を見ている雨蛙
内容は妻に時効の古日記
子の親としての女房評価する
ビン越しに睨み返えしためだかの目
和泉市　西岡洛酔

私利私欲凡人の域抜け切れず
愚痴っぽく成ったと歳をけなされる
線香の煙の如八十路逝く
善人のぴったり揃えた足の幅
兵庫県　大江秋月

妻の知恵棚の上にも棚つくる
公害の空を呑んでる鯉のぼり
テレビ見る場所も私に妻の位置

永尾英断氏の急逝をいたむ

丹波から巨星が落ちた五月闇
宇部市　平田実男

買わぬ気で見ればダイヤも安いもの
どちらにもいい子になってさげすまれ
筒抜けの秘密を園児等大事がり

結婚記念日

十七年もったを妻と笑い合い　大阪市　河井庸佑

追いつめて逃げ道一隅あけておく
思いやりある叱りようとわかりかけ
転勤へせいいっぱいの世辞おくる
貧乏くじひいた両成敗の喧嘩　大阪市　柳原静香

甥作文コンクール入賞一句

車椅子胸のタイプが鳴り止まず
もう妬かぬ妻になっている真珠婚
ゴールデンウィーク孫待つ膝が寂しくて
ゼネストへ鳩は静かな日と想い　和歌山市　垂井千寿子

団体が帰る頃行く長谷の寺
初孫はあっちこっちに似てる顔
ナイロンの鯉公害に対抗す
寡婦となりやっぱり枠の中に居る　堺市　藤井一二三

またひとつ見舞うて胸の痛む嘘
内職の手が私学費を口惜しがり
息子さえ気に入るならと愚痴が折れ
女体開眼軌道がその日から狂い　神戸市　佐々木静泉

連休はわが家で過ごせと悟ったり
節約ムード日曜ごとの雨でよし

毒舌も丸みを帯びてくるも年
たとえばの話相手にまともすぎ　高槻市　福田丁路

巧まざる女盛りのテクニック
だからと云って死ぬ勇気なし
曰くありげな孫の親切　仙台市　川村映輝

レイオフのつぎに来るもの気にかかる
スマイルも美濃部と違う女王様
見さかいもなく口答えする反抗期　貝塚市　行天千代

嫁ぐ娘へ一針老いの針運ぶ
嫁ぐ娘と最後の旅行は空を飛び
先き嫁った妹に負けぬ荷を持たせ　東大阪市　斎藤三十四

マイペース歩幅の狭さだけ遅れ
環境になじめぬ一人隅にいる
タンポポへ蝶は道順聞きに寄り　小松市　馬場魚山

万骨を枯らし高官空を逃げ
通過した予算空地に小型ブル
雨降りへ棄権と決めた車椅子　大阪市　鈴木生仏

ゴーゴーを見て腹の立つ年に成り
ストのため父の葬儀も間に合わず

ストストと息もストする時が来る　加賀市　細呂木魯木

世相には無関心優雅に金魚鉢
姑へ気づかう嫁のいじらしさ
あこがれたひげも無精ひげで終え　岡山県　出原敬一

団欒の灯へ郷愁の少年工
妻楊枝くわえ官舎はのどかなり
垣根越し今日はあちらの愚痴る影　松山市　谷のぶお

思い出を抱いてぼたんの花のそば
輪になって手をつなぎたい地蔵さま
笑顔して来る女房と町で会い　松江市　中川晃男

アルバイト料だけ叫ぶ選挙カー
クィーンスマイル日本の春へふりまかれ
赤い色さらって嫁にいっちまい　松江市　恒松町紅

ネクタイを選ぶ好みに妻が居る
意思疎通一夜上司に誘われる
亡妻の知らない孫がよく育ち　守口市　村田瓢太

怪我入院一句

まだ一寸早いと冥土で断わられ
拳族がふえて泣いたり笑うたり

雑草の生命抜く手も追いつかず　和歌山市　内芝としよ

深酒へ妻は無言のお冷や出し
二人して選んだ結城を着て温し
生き抜いてほほえむ母の深い皺　兵庫県　河原みのる

春霞確に吸うて朝仕事
あと幾とせ見当つけてプラン練る
元の鞘埃もつまり錆もつき　竹原市　時広一路

貝殻の泣き声ものせ波の音
男一匹女の城で立ち往生
白紙の中に小さな文字が生きている　羽曳野市　塩満敏

団結の赤い腕章新社員
てれもせず中年ポルノ行くをきめ
よく見ればシャツのボタンがぐいちです　東大阪市　桑原喜風

信仰を説く先輩の持つ誤解
総入歯医師にご縁も遠く居る
使い捨て一度は老いの眼にも入れ　鳥取県　森田布堂

卵抱く母性炎に羽ばたかず
棺が出るそのお隣は産気づき
鉄骨を組む溶接の火を降らせ

和歌山市　吉野冨江

派手を着る夫の眺める猜疑心
さしがねをかたく口止めする電話
裏預金裏の裏まで気を配り

大東市　土岐トク子

スイスより来客

「ダンケシェーン」「アリガトゴザイマス」で乾盃す

祝娘の結婚三年目

亡夫うすれ娘を祝う気にやっとなり
母の日に泣かす娘の走りがき

岡山県　直原七面山

夕桜　女心に灯をともし
空想の世界で美人の娘を犯し
女抱けば女女の音で鳴り

唐津市　新岡回天子

昔なら終えた人生恋をする
雀の子順番うまく行くのかな
立ち込める紫煙協議はまとまらず

大阪市　藤田頂留子

クィーンスマイル一億の目に千両
弁明をすればする程なおみじめ
ブス胡瓜切れば同じと人気有り

宿毛市　山本窓花

あやとりの紐も素直な明るい日
温室を出し太陽のありがたき

明日の目をつなぐ六十路の一思案

大阪市　福井多蘭子

遠山は雪里は桃咲く独り旅
蔣総統死す俺は因縁浅からず
彼岸帰省うれし思わぬ雪景色

大阪市　今西章雅

遺句

無為無策こんな時はと早寝する
公示地価鑑定方式変えて下げ
孫に消ゆ年金悔いなき老の幸

菊沢小松園

かたりべの思い違いのまま通り
気違いにまともな人が笑われる
ひとことの断りもなく先に逝く
堕ちて行く女に火傷させられる
芯尖り過ぎても廻らぬ独楽になり

若本多久志

春や春何が不満の雷鳴ぞ
閑居して不善企めぬ老いを知り
老妻の小言だんだん亡母に似る
古くよき時代の言葉暖ためる

長崎の旅

一こまの歴史へしばし瞑想す
一日の覚悟に向う新茶の香

尼緑之助

スカートのひだが話題で婦警午后
考えこんで歩くサラリーマンの背
ぬけぬけとテレビでしゃべる今晩も
夫婦――こんな番組が修身か

浜田久米雄

賃金を上げろとストを四日する
昭和五十年で明治のことを言い
そろばんをはじけと酒がまた上がり
この頃の酒はほんのりしか酔えず
故人にはなりたくはないそれっきり

本田恵二朗

小鳥籠若葉の合唱聞いている
重そうに縁起かついでけつまずき
靴の音春の陽気に乗っている
売る学は持たず授ける学を持ち
未亡人の凱歌初孫授けられ

正本水客

れんげ畑を風が渡って春を押しやる
城跡に風が生れて敗残の兵に似る朽葉
牡丹の向きに表と裏があってボタン咲く
墓ひとつひとつにボタン供えて牡丹寺
表現の言葉を失ったとき美しい
長崎の霞はまるし湾円く
磔像へつるべ落しに夕日落つ

橘高薫風

天草五橋遠い二つに日が当り
かまぼこと平戸未練を持ち帰る
小便を風に散らしぬ大瀬崎

北川春巣

中労委公労委ストまだ続く
スト休みしてると集金ばかり来る
退職の未練名刺へ元と書き
本棚へズラリ衝動買い並べ
思いっ切り食べたい欲の肥満体

川村好郎

京都刑務所

聴いてくれる青年囚の顔持たず
香水の残る座席を譲られた
妥協なき意志が煙草を押しつぶす
はげかけた傘でパートに出る老婆
過去へ過去へ雨のしずくをひとり聴く

西尾栞

隠岐吟行

連絡船下りて素朴をきく訛
逝く春や遠流(オンル)の島の駅の鈴
汽笛だけきこえる朝の雨の海
民宿民宿夕陽に並んでいる漁港
御所二つ今も悲劇の帝(みかど)たり

麻生路郎物語（7）

―新短歌運動の〝雪〟発刊―

東野大八

「雪」11月号の表紙

結婚した翌年の大正三年第一次世界大戦が勃発したので、路郎は東京を引揚げ大阪中央電信局の外国電報の検閲係になった。だが、この職も戦争終結とともに終りを告げ、大正四年、大阪市北区上福島中一丁目で素人臭い古本屋の店を開いた。店の名は葵書店。

―**南無葵　俗名小島善右衛門**　　青　明

これは六厘坊に傾倒した藤村青明の六厘坊追悼句の一句だが、路郎も六厘坊の家紋の「葵」を店名としたようだ。そして大正四年八月路郎生涯の川柳生活にとっては、最初の重要な関門ともいうべき「雪」を刊行したのである。年来の盟友川上日車は書いている。

「古川柳には古川柳独特の味合いと響きを持っている。私たちは久しくそれに浸って川柳作家としての揺籃期を過した。だが少年期はやがて迎える青年期の前提である。少年期には〝紅い〟と映ったもの、それは伝承的〝紅い〟であって、自己の発見した〝紅い〟ではなかった。ここに少年期と青年期との間に一つの曲り角がある。その曲り角を意識にとめず一直線に歩みつづけるのも、透徹した一つの道ではあるが、自己に厳しい執着をもつ者にはそれができない。そこに青年期の浮標が横たわる。路郎と私が手を携えて「雪」を発行したのは、まさにこの曲り角に立った時であった。

―**くろぐろと道頓堀の水流る**　　路　郎

―**行く末はどうあらうとも火の如し**　〃

こうして路郎の眼は、つぎつぎと人生のあらゆる角度にひろがっていった。

道頓堀の水の流れは誰の眼にも映る。だがその印影は、ただ事象そのものに過ぎない。いまここに示した路郎の句には、水の流れに秘められた人生の謎を究明しようとする自己の意識がもたげる。この意識こそは文字の枠外にあって、句そのものを深く味う者のみ与えられた拾棄の恩択である。事象を意識の上に深く捉えられるか、捉えないかは自己認識の深浅によって定まる。これが作家として起つ場合、最も重要なくさびだ。

かくて自己の内攻的推移に棹しつつ、路郎と私とは「雪」編集に心を砕き、異なる二人を一人格に結晶せしめたのである。これが「雪」創刊の動脈であった」（川柳雑誌S32・7古稀特集号〝雪の項―路郎と私〟川上日車）

「雪」創刊号は本誌と同じサイズの上質アート紙八頁。日車が句四十二句と六厘坊書簡（日車宛金剛山登山の記―六厘坊はこの登山の無理で発病、死因を作ったらしい）このほか日車作のコントが二頁、まさに日車の完全な独立舞台で、まるで日車特集号だ。

同誌二号は藤村青明の急死追悼号である。

―**天才か攫徒（かく）か瞳の落ちつかず**　　日　車

―**一杯の冷水捧ぐるものもなし**　　〃

―**浴衣掛一寸いてくる旅なりし**　　路　郎

―**絶命（たえい）ときに落日は瞬けり**　　〃

―**タングステンの破裂か青明の死か**　〃

同誌三号には、はじめて路郎が巻頭に十五句を発表している。〃店頭より事務室へ〃

―**晴　友去れば又あきんどとなり**　路　郎

―**他人ごとにあらず売れぬ日の続くとき**

—SOFAが欲しという妻のうら若く　〃
—妻や待たむ靴音を高めんか　〃

この号から「雪」もがぜん生彩を帯び、誌面も一種のけんらんさを帯びはじめた。そして〃雪同人〃の顔ぶれが裏表紙に載りはじめる。それによれば伊藤観魚・小穴隆一・中谷義一郎・信時潔・加藤静児・塩谷鵜平・宮林菫哉・松村鬼史・藤原游魚・小出楢重・牧野虎雄・兼崎地橙孫・石浜純太郎—雪幹事・斎藤松窓・麻生路郎・川上日車

画家・俳人・歌人・作家・大学教授など往時A級の学識者文化人を一堂にあつめ、学術随想論文スケッチと多彩豪華な紙面構成で、同誌十二号には〃樽屋おせん〃特集号を出し吉井勇・水島爾保布・喜多村緑郎・岡田八千代が寄稿している。本誌の絶頂期である。

「路郎君、君は飛行機の着陸式なり。白秋に触れ、浪六を解し、長唄を知る。相撲に猛かりしは昔日の高商時代なり。今はダブルカラーに替えチョッキ、しかして五匁のゴールド・チェーンは新たに購求せられたるなり、三分の粗髯を試みに一時間写真に撮る。聞説近く洋行の準備なり。旅行免状は正に君の胸間に収められてあり」（「番傘」三号〃番傘の人々〃TKL生）

これが大正期初めの路郎のハイカラスタイルで、いかにも「雪」幹事にも相応しかろう。路郎は若年から一種のスタイリスト（心身ともに）であったことが窺いとれよう。

さて、「雪」刊行に当って注目すべき傾向として見る人を捉える事は、路郎も日車も川柳という呼称を一切用いず「新短歌」の字句をもってし「雪」全刊十九冊をすべてこれで押し通している点である。

「八月一日（大正四年）日車とともに「雪」を刊行し、新しい傾向の句にひたむきに押し進んだ。それがため〃新傾向派〃と呼ばれ、既成派からは嫌悪された」（山雨楼メモ）

そうした新傾向の句とはどの様なものか—

—膝に足のせて一人の力なる　日車
—果太鼓今や鰻を裂んとす　〃
—葬ひの雑音街の底よりす　路郎
—微風の吹くまゝ光りに歩む　〃

＝「雪」八号より＝

「路郎と日車が〃新短歌〃と言うて十七字型の短歌風のものを作って発刊したのが「雪」でしたが、同人にはなりたくてもなれませんでした。各方面のエリートを選んでいたからです。発表の作品も多彩多様でバラエティに富んだ綜合雑誌でした」（霞乃書簡）

そういえば「雪」には、のちの画壇の重鎮牧野虎雄や小出楢重がカットやスケッチを描きまくり伊藤観魚が独特のタッチで絶妙の筆を揮い、吉井勇の一頁組の短歌もある。

ところで筆者が注目したいのは、塩谷鵜平と宮林菫哉の「雪」紙上における活躍ぶりである。なぜ、この二人は雪同人なのか。

鵜平は河東碧梧桐門下の重鎮である。虚子の〃守旧派〃に拮抗する碧の〃新傾向派〃を支えたのは実に鵜平である。大正四年三月に発刊された碧主宰の「海紅」は鵜平の全面的な経済的援助で出た。編集は滝井折柴（孝作）中塚一碧楼ら碧門のそうそうたる顔がずらりと並ぶ。鵜平は碧の右腕と目されていたという。鵜平は岐阜市郊外江崎村の大地主で、政治に関係して家を潰されるより俳句の方が家は安泰というので、家人がむしろ積極的に俳句を奨めた。彼は若年から新聞日本の碧俳壇に傾倒していた。本名塩谷熊蔵。

鵜平は伊藤観魚とは同じ明治十年生れで、碧門を通じて親交を深めた。鵜平は崇拝する子規を観魚の兄に伴われ伊予松山の子規堂に訪れたりしている。観魚は名古屋市の料亭金直の二男で、俳句に熱中して義絶になりかけた程で、雪同人は大阪の藤原游魚の紹介による。観魚がまた鵜平を誘った。鵜平は「海紅」のパトロンであると同時に「雪」のパトロンでもあったらしい。

宮林菫哉は長野県生れで本名弥吉（M20生れ）若年から思想的なことで特高につきまとわれ、職業も転々とし大正三年碧門の縁で鵜平を頼って岐阜に来住し、鵜平経営の梨畑の人夫で三年を過した。「雪」終刊号（T6・2）は、牧野虎雄の二頁のクロッキーと、あとは菫哉が俳文二頁と、作句五十句で埋めわずか八頁の雪終刊号は消えていくのである。誌数十九冊の終刊である。路郎と日車もここでは完全に筆を絶っている。

路郎が川柳を新短歌と銘打ち、川柳における新傾向を目指したのは、鵜平をパイプに碧梧桐を信奉したのだとの説があるが、誤りで

ある。現に路郎は雪誌上で碧の講演に反発し、碧の俳壇制圧の態度を激しく非難したあと、彼自身の新短歌観を次の様に述べる。

「今後の自分はどこ迄も自己の作品の上には真と新との尺度を用い、自己の芸術と自己の生活に真摯でありたい。（中略）少くとも自分自己を欺く様な芸術に生きていこうとは思わない。この意味において新短歌は要するに自分の日常生活の呼吸そのものであり、更に自分の信仰が把握する処の祈祷である」（雪六）

この主張は子規が明治三十一年短歌革新に手を初めた頃の主張を背景としている。路郎の雪における新短歌運動は、子規に焦点を定めていたことは明らかだ。（S32古稀特集号）

路郎が大正四年三月「番傘」同人を辞退し、その五カ月後に「雪」を出している。

「彼が番傘を去ったのは、よしの夫人との結婚問題が動機となったように噂する人もあるが（筆者註—本連載(4)参照）それはたまたま契機となったまでのことであって、むしろ創刊当時に参加し得なかった不満をはじめとして、編集に介入し得なかったもどかしさや、所謂学校出としての孤独の淋しさ等が累積した結果と想像される。かくして昨日の親友は今日のライバルとなり互いに関西柳界への翼を伸ばして行く運命の人となったのである」（「ふあうすと」五〇七号〝路郎の番傘時代〟堀口塊人）

このような見方が往時も現在も一般的な観測のようだが、山雨楼メモにはきわめて重大な一項が以下のように記されている。

「雪は第四巻第二号（T6・2）で廃刊した。半歳で一巻で十九冊を正味出したわけだが、この廃刊の理由は文芸的日刊新聞を計画するために廃したもので、日刊新聞はついに諸種の都合により出なかった」

塊人の観測によると、水府が路郎に相談なく「番傘」を発刊したことが、結果的には路郎の「雪」をひき出した、といったごく単純な観測のようにもみられる。だが実はもっと底の深いものが路郎側に潜在していたということが言えると思う。

筆者にいわせれば、塊人の指摘する路郎と水府の〝ライバル〟意識は、新短歌志向の路郎と、伝統川柳志向の水府の、作句上のモチーフの異和感に伏在する、と断定したいのである。番傘誌上に路郎が執筆した〝川柳講座〟を水府が鋭く批判している。路郎はここにおいて番傘同人を下りざるを得ないと感得した、少くともそういうことが考えられるのである。

ともあれ文芸的日刊新聞の発行という途方もない夢は、二十八歳の路郎らしい発想だが、このニュアンスは後年の「川柳雑誌」の発行へとうけつがれたことはたしかである。

閑話休題、路郎を雪時代に還えそう。

「雪」が勢いのよい時点では、路郎は飜案もの、小説、散文を手がけ多彩な才能ぶりをみせてはいるが、卒直にいって稚拙そのもので再録に耐えるものはない。その中で、雪終刊の前夜の十八冊目に、不死鳥の筆名で「庖丁と大根と葱」という注目すべきエッセイがある。

「庖丁がスカッスカッと大根を切った。大根は別に痛そうな顔をしなかった。かくあるべきを予想していたように。（中略）葱は悲しそうに庖丁をみた。もう一日の命乞いをしたが庖丁は耳をかさなかった。青い血が止度もなく流れて葱は悪臭を放った。ばかな奴だ、これが俺の日々の仕事ではないか。庖丁は寂しくわらった。くる日もくる日も惨劇は続いた。いつしか庖丁の腕が鈍ってきた。一寸した事にも疲れを感じるようになった。俺もとうとう錆のくる日が近づいた。永遠のために俺はどうしたらよいのであろう」

新短歌運動に絶望するそれは路郎のうめきともいえるのではないか。切字の多い路郎作品が同じ誌面につぎのように掲げられている。

—とむらいのしづしづといくひなたかな

—大根さげて婢のもどるひなたかな

—こうがいの銀はさびしくひかりけり

島五月

壱岐　光武弦太朗

春がいっぱい峠のカーブミラーにも
晩春の渚　素足で走りたし
まじまじと草喰む牛に睨められ
青葉風　鯉も褌褌もひるがえり

誹風柳多留廿五篇研究

—（六）—

清　博美・西原　亮・八木　敬一
鈴木　黄・紀内　恒久・室山　三柳
青木迷朗・入江　勇・岡田　甫

西原　亮

103　**おめでたさ槍も長柄も飛上り**

清＝大名家で何か大変おめでたいことがあったのであろう。槍持の持つ槍や長柄持の持つ長柄などが、勢よく宙にさし上げられて、祝う状態を詠んだ句。

八木＝同様に考えるが、どんな場合なのかすっきりしない。若君誕生か。

青木＝大名の奥方、無事若君御出産という所か。

岡田＝青木説の通り。

104　**桃の花冠へちるのとやかさ**

清＝三月三日の雛祭。そなえた桃の花びらが、内裏雛の冠へ散る。のどやかな雛祭の情景である。

青木＝賛。美しい句。

岡田＝礎稿に賛。

105　**御たいくつ昼夜寝耳に水の音**

清＝武家法度により、大名は参覲交代をせねばならなかったが、その道中は大変な難儀であった。その一つに大井川の川留めがあったが、川が増水すれば、いかに大名とはいえ、これを渡ることは出来ず、減水するまで幾日でも待たねばならなかった。本句も、その川留めにあった参覲交代の一行を詠んだ句。

大名で明き店ふさぐ五月雨　宝八・一二・五

八木＝賛。「寝耳に水」は突発的変事に使用する語だが、この場合、昼も夜も一日中増水した水の音をごろ寝をしながら聞いているという逆説的な面白さであろう。

大名とまくらならべる川とまり　宝七・一〇・一五

室山＝同。「御たいくつ」で大名をあらわしている。「川留」については『川柳東海道』にくわしい。

岡田＝同。

106　**おく様のおしやく妾のときやくせ**

清＝本句の「おしやく」は、しゃくにさわるの語に「御」をつけたものであろう。同時にときゃくとの語呂合せでもあろう。妾が妊娠して、つわりに苦しんでいるのが、奥様のしゃくの種という意。

青木＝「吐逆（ときゃく）」は『広辞苑』によると「一度のみ下した食物が、不随意的に胃から口中や咽頭に逆行してくる現象。吐気や胃痙攣性収縮のない点で、呕吐と区別される」とある。

西原＝賛。斯様なのを「癪の種」という。

岡田＝礎稿に賛。

107　**花の翌日御居間を毛虫一ッはひ**

清＝春の花見は、当時の人達にとっては、大きな年中行事の一つであったと云える。とりわけ女性の喜び様はひとしおで、朝早くから起きて仕度をしたものであった。満開の花のもとで、飲めや歌えやと遊んだ翌日のこと、居間を一匹の毛虫がはっていたという。誰かが着物にたかった毛虫に気がつかずに引きあげたからである。『川柳年中行事』の頭註には、「幕か毛せんかに附いて来た毛蟲」とあるが、これでは居間をはわない。やはり着物にたかって来たものであろう。

西原＝毛虫が着物についていたら、気付いて大騒ぎとなる。これは、やはり幕や毛せんが無難。

岡田＝西原氏説の通り。

108 **われた田へ宝の金をぶちまける**

清＝主題句、宝井其角の雨乞の故事を詠んだものかと思うが、「宝の金」のうち「金」がひっかかる。「宝」は当然宝井のもじり。

八木＝「金」の字に問題あり。「名著本」は「水」となっている。原本の字読みにくいのですが、前後のつながりからいって、金ではなく水でしょう。

岡田＝同。

▼五月号の本欄P25上段に、入江氏が張飛のことを「美髯公」としていますが、これは〝関羽〟の誤まりです。（室山三柳）

作

創造の神が選んだ臍の位置　今治市　月原宵明

貴方ならどうするなどと詰め寄られ

電柱で落選いつまでも微笑　上田市　金子呑風

林檎園初雪ほどに花が落ち

隠居所も一枚ぬいだ馬鹿陽気

鯉のぼり男だと云う風の音　大洲市　米沢暁明

近

捨てられる先きにこっちが捨てる肚

ベテランに花をもたせて気が軽い

幸福の絶頂だった夢が覚め

まだ若いお母さんだな子を叱り　岐阜市　市川鱗魚

本心の恋も水商売にされ

命ある力石から芽が覗き

落ちつけぬ母夕刊の少女記事　東京都　池口呑歩

もの心つけば不幸の星の下

子心にかりそめなれど養母は養母　今治市　長野文庫

団地から働らき蜂をバスに乗せ

かげろうとなり若草の化身舞う

聴診器当てて直感たしかめる

・同人吟・

秀句鑑賞

——前月号から——

正本水客

島椿　すき間を海の色でうめ　阿萬萬的

椿の紅と南国の海のあおと強烈な原色の対比、すき間を海の色で埋めは絵画的叙法とでも言おうか。

たら子またひとりぼっちの火ではねる　黒川紫香

妻は前に死別し子供達はそれぞれに別居している。少し侘しいが心静かな夕餉、たら子のパチパチとはねる音が聞こえる。

母の重さ妻の重さよ桜咲く　堀江芳子

九カ月振りに命を全うして退院された句主の心に花が咲いた、時は春である。子に対しては母として、夫に対しては妻としての命の重さが泌々と心にしみる。

花咲いて太古に続く春霞　能登原白水

新しい発想や表現がある訳ではないが、公害もインフレも感じない春風たいとうの気分が得も言えない。

歩くとこないよと旅をすすめられ　高橋操子

新幹線、バス、温泉、バス、名所と観光の列続く。

人民は弱し受付でも叱られる　工藤甲吉

文句を言われても一向に応えていない人物が眼に浮んできて微笑ましい。人民が何となく利いている。

屈辱は拇印の指を押さえられ　山根白星

拇印の指を押えられ、胸にズシリと屈辱を感じさせる強烈な句である。上五屈辱はと説明して仕舞わない言葉を探したい。

花開く　わが娘へ遠く妻とわれ　中川晃男

娘の結婚を迎えた父と母。遠くの二字が千万無量である。

寝ころんで山背負う重さかな　板尾岳人

斜面の這松に寝転んで無限の空と相対している、虚空のもとに山を背負うて立っている錯覚を楽しむ、山男だけに許された一と刻である。

善人にまた直球で勝負され　松下梁水

直球で勝負とは面白い、直球を受ける方もまた之に劣らぬ善人であろう。

たっぷりと黒髪洗う花曇り　羽原静歩

たっぷりとと花曇りが言うに言えぬ情緒をかもし出している。

マッチする間合いに顔色読んでくる　中川滋雀

日常よく見聞する情景であるが、逃さず捕えた細心さを戴く。

善人の顔をして花をほめている　若宮武雄

美しい花を賞でる、その一と刻は人みな仏の心にかえるのが当然であろう。

六段の調べに乗って桜散る　竹中肖二

花は別に心あってリズムに乗っている訳ではない、之を眺める人の心にある。

風光る　燕抜いたり抜かれたり　西いわを

気取らない言葉で美事に長閑さを詠いあげている。

意気地ない姿で振子止ってる　森田カズエ

振子の止った大時計の姿を意気地ないと見るのは川柳の眼である。

河野春三編集

『風』　季刊　6号

川柳・俳句・詩・好読みものは定評のあるもの。清涼感が全ページにあふれる。

—発行所　〒569　高槻市竹の内町22—1　河野方　風発行所

・水煙抄・

秀句鑑賞

——前月号から——

谷垣史好

春の海抱かれてみたいうねりよう

柴田恵美子

小学校の三年から旧制中学の五年間、おおよそ十年ほどを僕は、瀬戸内海に面した漁村や町で過した。だから今でも、海を見ると、限りない郷愁を覚える。広々とした海のふところに抱かれて、日がな一日眠ることが出来たら、どんなにか心が安まるだろうと。

海は僕にとって童話的風景であるが、作者は春の海に官能的世界を見出された。大洋の遙か彼方から、ゆったりと寄せてくる「うねり」は、たしかに官能的であり、そのリズムは果てることのない快楽のリズムを想像させる。そういえば、かの梶山季之先生も「快楽の絶頂とは、あたかも波の間に間にただようが如き状態」とおっしゃった。

春の海に「抱かれてみたい」と感ずるのは女のみが持ちうる心象風景だろう。

もう誰も儲かりまっかとは言わず

池田露子

四十年の繊維不況のとき大阪で「死に死に」という言葉が流行った。

「どないだ、儲かりまっか」

「あきまへん、もう死に死にですわ」

あのときに比べると、今の不況は、遙かに深刻である。物価抑制を大義名分にした総需要抑制と金融引締めが、もう二年近くもつづいて産業界は青息吐息、もう一ぺん田中の角さんに出て貰うたらという声が出るほど。

うっかり「儲かりまっか」など云おうものなら、頭から水でもぶっかけられるのがオチだ。大阪弁をうまく利かせた時事吟。

拝観料取って賽銭箱も置き

麻野幽玄

たしか秋篠寺だったか、今春から中学、高校の生徒の団体見学はお断りすることに決めた。理解力のない者に来てもらっても騒々しくて雰囲気をこわすばかり、却って迷惑というわけだ。これは一つの見識である。

だが、奈良や京都のたいていの社寺仏閣は観光客の誘致に積極的である。大きな駐車場を設け、専門のガイド僧を置き、拝観料も、いろんな名目をつけてふんだくる。また、そういう商売上手なところほど人気があるのである。

商魂の逞しさにあきれ、苦笑しながらも、恐らく作者は、賽銭箱に、なにがしかのコインを投げ入れたのであろう。

遠ざかる影いくたび人を失いし

小谷葉子

信じては裏切られ、裏切られても、なお信じたいと思う人間の哀しさ。恋を失い、友情を失うたびに己れひとりの影をいとおしむのだ。ジーンズを穿いた若者が云った「サヨナラだけが人生さ」。

でも人生って、そんなカッコよいものではないんだよ。映画のラスト・シーンを思わせる句。

許す気のやはりけじめはつけたがり

中谷利美

お互いに愛し合っているんだし、出来たものは仕様がない、許してやりましょう。いつまで我を張っていても二人のためになりませんから、そう云われて、許す気になったものの、やはり本心は釈然としないのが親心。簡単でいいから式を挙げろ、披露宴ぐらいはやれ、となる。

世間へのけじめもあろうが、それよりも、自分自身へけじめをつけたいのである。

他に心に残った句。

別れた日味の無いガム噛んでいた 亜成

報われぬ愛と知りつつ花を生け 文子

白鳥の羽根の下から澄んでくる 洋之

死に際が鮮魚の生きの良さになり 古啓

風薫るともいえずここらは大正区 欣一

錆ついた錨は海に戻りたく 葉子

菊沢小松園選

寝屋川市　江口度

石なげるそこに静かな池があり
口下手の夢の中ではよくしゃべれ
風呂おとす音うつつ聞く茶の間
も一人の僕が赤旗振っている
呼びにやる子供つぎつぎ帰らない

大阪市　神夏磯道子

丸いから掴まる先を見失ない
下心あるお世辞でも嬉しがり
継木した親子の愛だ語らない

新潟の旅

春の野の向うに妙高冬で佇ち

和歌山市　桑原道夫

不器用な恋を青春とも思い
寝転んで読んで文学書は楽し
あそこから飛び降りはったと顎で指し
ハンカチが落ちて踏まれていく歩道

柏原市　小谷葉子

色彩に迷わず青い果実のままが好き
花を摘む一つの愛が芽ばえそう
あなたと私　恋の暗示に歩るかされ
ああ平和草の匂いのする夫婦

寝屋川市　柴田恵美子

鮎はまだ川に居る気の姿塩
上役が秘かに神経科へ通い
まっすぐな愛をつらぬく鞭を持つ
夜盗虫新芽の精になって落ち

今治市　今井松花

外国の福祉で日本批判され
式場でもう花婿を指図する
どうしたと指のニコチン聞いて呉れ
お包みに世間知らずの金を入れ

豊中市　高橋古啓

曲がり角曲がれば過去は見えません
ヒマワリの種只一夏の愛でした
聞くだけなら聞いて下さりそうな神

心から愛した慰謝料貰います
青森県　波　ただお

輸血して貰った方が長生きし
農政がどうあろうとも鍬握る
今日だけは叱るまいぞと子供の日
宿帳に書く妻の字に目をそらし
尼崎市　中谷利美

あの人も患者でしたか精神科
男好きする娘の方が嫁きおくれ
退屈なものに秘密のない夫婦
誘惑に勝って身にしむ夜の風
吹田市　藤原世史春

弁当に妻の細い技(わざ)が見え
静寂が寛の声を運びくる
従順につき来る伴侶わが鞄
目に青葉　山ほとぎすストの旗
今治市　古野伶人

予報より確かに肌が雨を知り
言う事を聞かぬ子雀庭へ落ち
天長節此処に明治の民があり
今治市　真山国彦

御自慢の盆栽盗んだのも混り
花嫁を待たせて瀬戸の霧晴れず
つぶれぬと知って居るからストが出来
和歌山市　樫村ふみよ

大空に恥じる小さい心持ち
二日目で家が気になる主婦の旅
ちっぽけななやみと地蔵笑み給い
大阪市　堀口欣一

追分がここにもあって日本です
東海道やはり蒲原由比興津
横綱を締めてから来る不仕合せ
大和高田市　岸本豊平次

飼犬のプライドが鎖よう切らず
親の夢はみ出したがる反抗期
デモの手は横につないで輪にならず
河内長野市　井上喜酔

本心は言葉にならず腹の中
毒舌も定年前は笑うだけ
割り勘は外へ出てからみな集め
鳥取県　谷岡芳枝

過去背負いせおい続けて歩を止めず
血と汗と涙で人間らしくなり
一言の底の流れを受けとめる
島根県　徳安満水

廃校の庭へ記念樹だけ残り
夜長まだ暮しの掛る針を持ち
出稼ぎを励す夜長の筆を持ち
新潟県　市川一峯

妻立たせ男同士の話しあい

背の子の指図通りに歩かされ
ストの駅時計だけは動いてる
鳥取県　林　露杖

這うも性絡むもさだめ豆の花
次々に追い越す背中見て歩るき
氷水サクサク褪めた愛の音
尾鷲市　渡辺伊津志

重役と話せば部長聞きに来る
肩書をつけぬ名刺は別に持ち
羅針盤玩具代りにする怒濤
鳥取市　有田鹿の子

夫の死

十日目の水は唇開けたまま
好きだった酒で唇拭いてやり
これっきり逢えない亡夫の爪を切る
松江市　梅本登美也

文鳥が寂しがりやの手になつき
憎めない人がずけずけものを云う
チューリップ面会謝絶の部屋で咲き
高槻市　山田スミ子

味の素汁の味音立てて賞めている
境界線竹の子は知っていず
鈴の無い猫にねずみは嘆いてる
島根県　松本文子

かたつむりお前に歩調を合わせよう
肩書きの向うが見える名刺出す

倖せなひとと云われて泣けもせず
今治市　園部正則

問われても弁解だけはせずにおく
ひなどりはいつ羽搏いて何処へ行く
今治市　蔦本昌道

会えば足る心にひそとセレナード
思慕ひそとカメラもカーも待ってます
豊中市　安藤寿美子

新築の風鈴をつる軒がなく
革命歌松のみどりが曲っとり
鳥取県　加藤茶人

物干の植木となって枝が伸び
鯉のぼり団地サイズにして泳ぎ
松江市　岡崎雪美

母がないなんて言わせぬ祖母の愛
ばらの国ばらそのままのエリザベス
島根県　岩田三和

メーデーに七色の旗ふったなら
逃げ足の早い女神よどこにいる
倉敷市　高山みどり

咲き誇るばらはその名もエリザベス
鈴蘭と乗った車は香ります
八尾市　納史葉

傷口をなめ合う筈の傷がふえ
それからは泣かぬ女で虹が消え

鳥取市　徳田水滸

老後見る保証もないのに子を育て
保証期間過ぎて時計が狂い出し

鳥取県　森田正

赤電話転んだ銅貨ほっとかれ
高砂の一声欲しい青だたみ

鳥取県　田川はじめ

裏道も覚えてエリートからはずれ
ふる里の土が箱庭からこぼれ

東京都　宮崎美津子

説教はこくりこくりと有難い
深山路で再び花見の客となる

西宮市　朝山千世子

英女王去って微笑が瞳にのこり
五月晴青春かえる友を得て

島根県　堀江蓮露

子のくせが親に似て来たのにあわて
草葺きの実家のそばに新築し

愛媛県　小山悠泉

花咲いて散って五月の風みどり
母の日は言うて父の日子は言わず

新潟県　高野不二

目を入れてほしいダルマがある二人
のらくろを親程子供喜ばず

鳥取市　岸本無人

当てこすり言っているのにうなずかれ
入歯代払う入歯を食いしばり

八戸市　島田昭治

連休もストも縁ない暮し向き
月給を聞かれ水増しして答え

東大阪市　崎山美子

あいまいな唄に仲居の助け舟
雨傘にヒラヒラ花の通りぬけ

八戸市　安田紘

走らせて走って浜辺の恋すすむ
肚割った話へひと言多すぎる

竹原市　鈴木かつ子

上品に叱る日ママに客がある
お使いのメモひらがなで用がたり

橿原市　西本保夫

理解あるお人と言われ出世せず
花好きの妻にあちこちせまい庭

島根県　飯塚虎秋

老残のあしたのばらの色を選る
まな板の音に夫婦の和解聞く

鳥取市　勝山紫宏

口で固辞裏で掌泳いでる
娘と母の砦父にも崩さない

鳥取市　大塚豊生

突き破る壁など持たぬ幸に住み

一生に一度の男女すれ違い　堺市　栗本藤持

地下を出て今日も佇ずむ右左
宝クジ当ることなくまた並び　今治市　伊藤一郎

虫眼鏡字引の画を確かめる
逆立ちの政治陸橋歩るかされ　今治市　大本バット

先が無いのに慾張りが終らない
校長に栄転と云う島流し　諫早市　江副二牛

予想屋を泣かせる馬でよく稼ぎ
寄せ書きの旗仏壇にひそと住み　大阪市　平井露芳

家庭でもどうぞとコーヒー屋豆も売り
外れても予報で坊主にはならず　岸和田市　池田香珠夫

長生きをしたら損だという保険
沢庵を噛む音嫁も古くなり　岸和田市　池田露子

呆けて見せる賢こい嫁がいて平和
点滴がひびく鐘乳洞の底　唐津市　田中三男

柳の芽まだ出ぬうちに初ツバメ
脱税はしても賃上げ出し渋り　泉佐野市　大工静子

捨犬の尻ぬぐい保険所へ連れ
清潔に咲いて山吹身ごもらず　大阪市　新川貞祐

二年保育百まで漢字書いて見せ
入学に母も既製の黒い絵羽　尼崎市　大垣たもつ

薄物になって洗濯機の機嫌
札束の一つも賭けたい結果出る　名古屋市　大林曲ん手

それぞれの立場立場へ配かつ愛
誕生日　忘れる齢を笑い合い　羽咋市　三宅ろ亭

ぜんそくにならず鶯今朝もなき
せせらぎに鍬と並んで脚浸たす　伊丹市　樫谷漫柳

ソロバンで値切られている計算機
子の成長分だけ親の権威落ち　羽曳野市　麻野幽玄

望郷は野に咲く花を鉢に植え
棘のある花と手折ってから気付き　高槻市　竹内花代子

毛を染めて物忘れする年になり
　　友結婚
明日からは貴男と呼べる仲になり　　堺市　羽田一扇

遮断機が下りて救急車も止まる
同病で逝った話をふせておく　　寝屋川市　香川亜成

はりつめてはりつめて風船われる
ふうせんのふくらむとこに針がある　　姫路市　大原葉香

日本中桜と選挙に疲れ果て
七人の敵に備えてヒゲを剃る　　唐津市　山下勝一

法治国いつも国会日が足らず
犯罪もアメリカ並の民主々義　　唐津市　田口虹汀

九官鳥変なくせまでおぼえこみ
母の日の花は外国生れなり　　唐津市　岩下照沖

つけまつ毛女に嘘がまたふえる
薬包紙キチンと畳む子で不憫　　大阪市　横地正彰

年金の顔かと六十路が脂ぎり

紐つけて口輪つけてて愛犬よ　　赤穂市　谷口赤童

昔から花は桜とおだてられ　　唐津市　岩崎実

難問にいつしか背中も丸くなり　　和歌山市　西山幸

袈裟取れば艶歌も歌う若い僧　　出雲市　藤井晴月

燃えるものこころに抱き春惜しむ　　堺市　堀畑日々子

いつまでも新かなづかいおぼえかね　　和歌山市　吉野久子

耐えている女の眉にとげが無い　　鳥取県　伊藤静枝

人生の誤算長男婿に行き　　尼崎市　駒村岳麓

楽々と揚った凧に糸切られ　　新見市　吉田落猿

一合の酒を老妻と分けて酔う　　大阪市　村島秀村

造幣局花の雨降る通り抜け　　大阪市　須浦つね

遠い娘の便りを耳に電話切る

言い切ってから頼しい顔になり　大阪市　内藤ますえ

賞でた花散れば掃除に愚痴が出る　大阪市　花田繁子

傍線を引いて読む気がさらになく　富田林市　中村優

縁談が進み金策かけ廻り　鳥取県　福田保子

茄子南瓜実になる花が咲きはじめ　兵庫県　高橋近江

うらやましくバスのスト見る小商人　弘前市　小山内貞男

よく見れば女王にがみ走ってる　寝屋川市　福富隆子

土地買える金があるとき土地がなし　松江市　本庄快哉

ハネムーン母校のうたで見送られ　高知市　竹崎寛

労務者と云う教員に子を預け　唐津市　三浦ひろ坊

スリッパも呉越同舟入れ乱れ　堺市　檀野茂子

植木市三ケタは三ケタの花をつけ　岡山市　西田溥子

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 鳴門
政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

路郎先生の思い出

八木摩天郎

路郎先生の思い出はたくさんある。こんなことを云われたこともあった。

『会社がつぶれると云う事はネ（その時分、倒産と云う言葉は無かった）。三年位でつぶれる。五年を経て七年、十年と年を経れば、会社も軌道に乗って、基礎が堅固になる。五十年、七十年と経る会社は、決して余りつぶれる率が少ない。川柳も三年位で、スランプになる。その壁を打ち破って五年、七年と経て十五年、二十年すれば、その川柳家は一生やるよ。要は川柳は石を積むようなものさ。年季を積んだ人の川柳句には云い知れぬよさがある。それが年季の功と云うものだよ。』

川柳は結局は熱の問題だ。熱を絶さぬ事だとの話はなかなかにつきなかった。先生宅の近くの喫茶店。コーヒーの中へウイスキーを落して呉れての先生との一とき。興味のある思い出話ではある。

小島六厘坊の墓

自ら天才六厘坊と称して大いに川柳の革新運動に専念しながら病弱にして若くして死んだ小島六厘坊の遺句は今でも人に知られているが、六厘坊を知る人は皆無である。路郎師が、ご在世中でも、六厘坊を知っているのは僕一人で、水府先生は年が若かったので知っておられなかったと聞かされた事がある。路郎師が何時もよく話して惜んでいた句集の話だが、六厘坊から借りた句集が帰り道、泥にまみれ、水道で洗って天下茶屋の家の前の塵芥箱の上で陽にあててさらして置いたところ、翌朝、ゴミと一緒に持って行かれ、惜しい事をしたとの事、今あったら句集を出してやるのにナアと惜まれていた。

路郎師と私は、いつもよく歩いたが、歩いての話はいつも川柳の話ばかりであった。偶々天王寺の交差点に来た時、六厘坊の話が出て、こんな時だとばかり、先生、小島六厘坊の住居は、大阪の心斎橋畔だが、おそらく墓も大阪の何処かにあるでしょうが、大阪の墓の在る場所はと、聞いたら、早速、此処だと指さされたのが四天王寺の消防署の隣、黒い板塀の前に、中村冨十郎の墓ありと書いた立札の所であった。こんな近くに六厘坊の墓があるのかと思った事がある。

この程、昭和八年八月、大文館書店刊行の麻生路郎著「式辞と挨拶」の本の中の一節、作家と環境の川柳論を読んで環境が作家に及ぼす影響の甚大なるを説き精神的に物質的に苦痛が多い時には、その作家の作品の多くは光りを放ち一種の信仰的な光りを作品の上に見せるもので、奈良武、青明、六厘坊、趣珍堂、等は皆物質的に精神的に何れか一つか、双方共にか、苦しんであれだけの句を後世に伝えたとあるところから見ても仮令、六厘坊を知らずとも、句集に接せずとも、川柳の大先輩として彼の句を愛誦し、墓も四天王寺にある事位は思っていてあげて欲しい気がする。六厘坊がもっと、生きていたら、どんな句を我等に見せて呉れた事か。

近況

▼喜多流能楽の開祖初代七太夫師の住居堺市桜之町大道の旧宅趾並に、展墓のため喜多長生師が、四月十五日来堺、序に摩天郎居へも立ち寄られ、千利休や謡曲の宮尾道三、川柳の話まで出てしばし時を過された。流石に堺は芸文の都、それらの人々の史料保護、保存は堺人に課せられた後人への責務であると今更痛感した。

▼五月十日堺市立榎小学校に於ける奉仕活動ボランギャーの会に講師として「終戦前後の堺」をテーマに招かれ講話、メンバーは教育家の人々多数だった。

▼堺川柳会物故会員井上志寿さん（第二回堺市成人学校川柳講座受講生）の生前鍼灸師としての頌徳碑一丈五尺がこの程四名の弟子達で、堺市熊野町東五丁金蓮寺に建立、柳縁に連がる堺川柳会から五月十八日の除幕式に笑痴、宏子、摩天郎、徳子が参列焼香した。

▼堺市立図書館主催の郷土史講座の講師を応諾。六月十四日午後二時から四時まで堺市大仙町同図書館集会室で「堺の各町名の由来」について講話聴講申込オーバーして百三十名。

百人一首と川柳（13）

富士野藜馬

三五　紀　貫之

ひとはいざ心も知らずふるさとは
　花ぞむかしの香にほひける

この歌は、「古今集」春の部に「初瀬にまうづるごとに宿りける人の家に、久しく宿らで、程経てのちに到りければ、かの家のあるじ『かくさだかになむやどりはある』といひ出だして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる。貫之」と詞書して載せられてある。それで、

古さとへかくした梅を定家いれ　木賀（九一1）

人はいざ白梅匂ふ小倉山　杜蝶（五九1）

と川柳は詠んでいる。百人一首は藤原定家が小倉山荘で選んだのである。この歌の「花」は梅を詠んだのであるが、はっきり「梅」と表現された歌は、百首中一首も見えないので、

百人は言葉もかけぬ花の兄　木葉（四九35）

という川柳がある。また文句を取って、

香に匂ひぬると豆腐屋大騒ぎ　江山（一四〇4）

と、伊達綱宗の伽羅の下駄を豆腐屋に与えた伝説が句になっている。

貫之は色の真白そうな御名　花夕（三七7）

色白な男らしい名は貫之　雨譚（宮二33）

つらゆきを「面雪」に洒落た戯作もあり、

貫之の筆すり切れて京近し　手枕（一六一5）

貫之は、老年になってから土佐守となって土佐へ赴任したが、任満ちて承平四年（九三四）十二月二十日土佐を離れ、翌年二月十六日京都へ帰着するまでのことを書いたのが、「土佐日記」である。これが日記文学のはじめといわれている。

貫之は、紀望行の子で、醍醐、朱雀両朝に仕え、延喜五年（九〇五）には、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等と共に、「古今集」二十巻を撰し、みずからその序文も書いた。

天慶九年（九四六）になくなったが、何才であったかはわからない。

その貫之に、おもしろい俗説がある。それは、はじめ「實定」と称したが、ある時、宮中で垂簾にあたって冠を落し、それを咎められて、

今日よりは紀の貫之と呼びたまへ
　いま實定が冠落して

という歌を即座に詠んで、それから「貫之」と改名したというのである。實定のウ冠をとれば貫之となるという狂歌である。

これに川柳も興味をもち、

改名びろめ素頭で一首よみ　巨眼（一四四24）

暫時御無言ン冠の落ちた時　マコト（一四五24）

實定の冠こきんとはり落し　千之（一〇三36）

落る冠をとりあへず一首詠み　亦楽（二一〇4）

即吟一首改名の届書き　野荻（一五一34）

かんむりをおとすとつらに雪がふり　（安八濃3）

冠りをとって古今の御作者　中丸（一〇〇37）

實定は冠落して名をあげる　専河（八三12）

貫疋と読むと御名にはならぬ所　鼠六（一三八8）

粗相の誉れ貫之と召るべし　悟昔（一二五33）
其当座うかり冠りの落ぬお名　山桜（一六一1）
實定も沓なら名には困る也　案山子（一五四21）
實定の冠りは落ちて名をむすび　叶（一〇八9）
附鬢落し貫之の物語　松丸（一四〇3）
落冠も落馬も百の中へ入り　竹子（一四四24）
落ちて名高き冠と女郎花　呑口（一四三25）

などと作られている。「落馬」は僧正遍昭。「古今集」の序文について、

小町の穴を貫之はちっと掘り　木馬（九二23）
古今の序小町ばかりは穴が無し　河楊（四九17）

と詠まれている。（小町の項に概述）

三六　清原深養父（ふかやぶ）

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
くものいづこに月やどるらむ
（古今集）

この歌に対し川柳は

ふかやぶはさすが蚊の出るお歌也　（一五27）
ふかやぶの歌は蚊の出る頃によみ　雨旦（六六13）

と詠み、養父を藪にいいかけている。

また文句を取って、

夏の夜はまだ宵ながら這ひかける　末広（一一一7）

深養父は、清原元輔（四二）の祖父に当る。そして清少納言（六二）の曽祖父である。古今集時代の歌人で、中納言兼輔（二七）や紀貫之（三五）とも交わりがあり、琴が上手であった。

百人首養父一人に母二人　三朝（一六六1）

とも詠まれ、母二人は、道綱の母（五三）と儀同三司の母（五四）とである。

三七　文屋朝康（あさやす）

しらつゆに風のふきしく秋の野は
つらぬきとめぬ玉ぞちりける
（後撰集）

文屋朝康は、康秀の子である。光孝、宇多、醍醐の頃の人で、低い官吏として生涯を終ったらしい。父康秀（二二）の作としてある「吹くからに」の歌は、この朝康の作であるといわれている。

つらぬきとめぬ玉ぞ散るシャボン売　杜橋（一〇四20）

という文句取りの狂句がある。また父康秀も「秋の風」を詠んでいるので、

二人共文屋は秋の風を詠み　春駒（五六2）

と川柳に詠まれている。

三八　右近

忘らるる身をば思はず誓ひてし
人のいのちの惜しくもあるかな
（拾遺集）

この文句を取って、

誓ひてし人の命へ灸をすへ　金牛（五六22）

と川柳に作られている。遊女が誓った男の名などを腕に彫るのであるが、その気が変わると、その上へ灸をすえて焼き消すこともあった。また狂句に、染色のうこんにかけて、

うこん紫赤染も百で出来　香貞（四四10）

—右近、紫式部、赤染衛門

右近の病気業平をよびかける　麝丸（一四〇9）

—黄疸がうこん色になるのと、それに蜆が効くので、業平蜆を附会

右近は、藤原季綱の娘で、父が右近衛少将であったので、そう呼ばれたのである。本名はわからない。醍醐帝の皇后穏子に仕えていた。権中納言藤原敦忠（四三）や頭少将師輔等と恋愛関係があったようである。

ご投句にはゼヒ
川柳塔柳箋
一冊百円　送料七十円

愛染帖

橘高薫風選

大阪市　正本　水客
口紅の色夕焼けと向いあう
旅人へ岬は虹と手をつなぐ

大阪市　西出　一栄
女の香抜けてくすりの匂う祖母
コンパスの円は狂わず老夫婦

青森市　工藤　甲吉
ある夜は月の方から語りかけ
みな灰になる人なれど競い合い

島根県　小砂　白汀
一塊のつぶてでおわる無精卵
のし歩くただ一枚の緞帳で

岡山市　行本みなみ
おれとお前の首をならべる鬼のまないた
五月雨るる沼にうろこの一つ浮く

八尾市　香川　酔々
木蓮の白い鈍感鉄扉閉じ
人間が余って俺は昼寝する

鳥取県　鈴木村諷子
春の土菊の苗ごともらって来
むら雀一直線に並ばされ

鳥取市　河村　日満
蹲踞して風やりすごす夫婦仲
料理法ネタいくらかはやはり楽て

岡山県　出原　敬一
泣いていた女で告訴などしない
妻の語が堆積している胃のもたれ

香川県　三井　酔夢
父と子の男の修羅に立ちつくし
争いをさける子の眼の濁りかな

東京都　山根　白星
指先でめぐみてのひらに恵まれる
流れ矢に当る刹那の高笑い

堺　市　高橋千万子
化粧品値切らずいわしをば値切り
伏せている恋は女のたからもの

竹原市　三宅　不朽
牡丹崩れこのむなしさもやすらぎか
渇く胃に馬鈴薯の花とバラの花と

伊丹市　小川静観堂
日本画の平面描写に影があり
カインともアベルとも仲良しだった俺

八尾市　高橋　夕花
逝きし人ばかりに出会う夢の闇
古い手紙の焼いても胸に残る文字

柏原市　小谷　葉子
彩どりの筐で女を創りかえ
心病む春は私を置き去りに

池田市　杉田絵巳子
亀海を離れて苦難始まりぬ
春の陽を人魚は海の底で知る

富田林市　岩田　美代
人間や未練の彩が美しい
倖せなサラダのみどり盛り上る

倉敷市　水粉　千翁
少年が止まり少女はふり向かず
渚とはもらい泣きする貝が住み

大阪市　小出　智子
これからの私の壁に白を塗る
お訣れにもらった指輪かも知れぬ

東大阪市　竹中　肖二
凡欲を詰めて鞄を重くする
地球儀の裏へ気安く出張し

島根県　堀江　芳子
わが病いとしく想う生かされて
気休めと笑う茶絶ちをまだ続け

島根県　堀江　正朗
夢すこし倖せすこし妻と子と
愚痴ぽつりぽつり二人は生きている

高知市　古谷　恭一
ベトナムの戦禍へ鳩が舞いおりる
磯笛に女の歴史秘めながら

新宮市　大矢　十郎
病人に金借りに行く子養い
つり合いがどうにかとれた妻といる

倉敷市　小野　克枝
固い実が好きで人間性が褪せ
灯をつけて慎重を期す女坂

堺　市　山本　素郎
置酒歓語高天原に向い合い
バラードを弾き終えしゆび星に触る

岡山県　白岩　文衛
負けた日の心に注ぐ花の水
胸にまだ退かぬことばを一つ持つ

富田林市　板尾　岳人

取扱い注意河童の皿渇く
親指の爪から罪を捨てていく　和歌山市　沢山　福水

オリオンも落ちよ別れの夜の道
接吻のやがて散りなんバラを恋う　高槻市　若柳　潮花

紫に露も濡れてる藤の花
燃えて立つ舞妓のようにぼたん咲く　名古屋市　大林曲ん手

みの虫の蛾になるまでのリズム感
ゴキブリと住む人間も逞ましい　今治市　月原　宵明

生活を縛る鎖は錆びていた
冷えてゆく炎の壺を抱きしめ　竹原市　森井　菁居

バイブルを掌に脱税を企みぬ
コンビナートらしくさせてるスモッグよ　八尾市　宮西　弥生

運命線昔のまんまめぐり逢う
迷いから覚めろと裏窓囁いた　岡山県　嘉数千代香

人間開放こころの鎖なお重し
父に母に叛いた積木がいま崩る　倉吉市　奥谷　弘朗

核心をつけば遺憾の意でそらし
定年を潰しの効かぬ奴にされ　高槻市　山田　季賛

言い出せば引けぬ気性を笑われる
簡単にあやまっても叱られる　東大阪市　竹中　綾女

子に貰う軽いお札が重くなる

食虫植物地獄の袋飾り立て　尼崎市　黒川　紫香

たたずめば石仏さんも笑ってる
杉木立の中をきらめく太陽　和歌山市　小川佐知子

束の間のロマンへ能登の海猛る　大阪市　河野　君子

埋み火の母を深紅にカーネーション　今治市　古野　伶人

木曽節を木曽路で聞けば胸に沁み
戦死した息子に老後養われ　羽曳野市　麻野　幽玄

病者の眸に深い深い海がある　堺市　河股　緑水

果樹園の満開桜にまけぬ彩　八戸市　小泉　紫峰

目に青葉ボクの弁当花がつお　八尾市　大路　美幸

六十の女もおんな赤い色　松江市　岡崎　雪美

ざるそばの味もそろそろ初夏になり　高槻市　竹内花代子

情緒障害の背丈が父を超え　尾鷲市　渡辺伊津志

雨煙る街雨煙る城下町　松江市　岡崎　祥月

人妻と言う柵の内外　守口市　野呂　右近

ロボットよお前も自由が欲しかろう　神戸市　小浜　牧人

都市砂漠心貧しき人ばかり　今治市　大本バット

山晴れて母校が見えるダムの底　岸和田市　池田　露子

感情の波長合わないままふたり　呉市　槇田　英詩

今日からは嫁という名で墓参り　遺句　大阪市　今西　章雅

感無量欠損所得申告書　鳥取市　勝山　紫宏

快くなれと胸の時計がけしかける　和歌山市　桑原　道夫

横向きに歩いて蟹は一直線　富田林市　和田維久子

信じ切る倖せ人間味に触れる　倉吉市　今村　夕路

運命が交通事故でまた変る　大阪市　西川　誓二

人間のエゴ自然の鳥を籠に飼い　岡山県　竹内　翁童

酒煙草あがるあがると量がふえ　岡山県　池田　古心

床替えに抱えて軽さ胸を打ち　今治市　今井　松花

してやった受話器を置くと舌を出し　大阪市　新川　貞祐

駆け降りる階段赤いのが男　今治市　真山　国彦

渡り鳥啼く夜をせんじ薬飲む　松江市　柳楽　鶴丸

夕陽に映える神工摩天崖

同人特集・活字になった処女作（到着順）同人特集・活字になった処女作

小西無鬼

一ト飛びを蛙　熟考してのこと

自分の句が始めて活字になった！　この感激は柳人の誰もが経験する事である。

昭和五年か六年の丁度今頃梅雨頃の川柳雑誌麻生路郎選「近作」？自由吟の末尾に始めて拾って頂いた句である。三ヵ月全没での後で、病後自宅で療養中の句である。父の造ったせんざい(庭)の木蔭、籐寝椅子で蛙を見詰めての実感句だった。確か次月は「唇を許したように椿咲き」の句で私の青春の躍動が現れた句かも知れん。本社句会毎に「いのちある句をつくれ」の標示、いくつ何十才になっても頭にコビリツイてると共に同時、路郎先生が如何に偉大であったかと年経る毎に憶う。

福田丁路

まけさした金は孫への土産なり

「川柳雑誌」昭和五年七月号、路郎師選。川柳智識皆無に等しい者の十句から、初心者指導奨励の意味で、特に選んで載いた一句である。以後、病気、戦争等で休んだ事はあるが、兎角四十五年の柳歴と云う事になる。だが、今だに感銘を与えるような句も無く慙愧に堪えぬ。併し、過去の句帳を子細に検討していけば、川柳と共に歩んで来た、人生の道程がはっきりと浮彫りになる。真に貴重な記録と云わざるを得ない。私は川柳との出会いを嬉しく思っている。

市場没食子

兼題「目薬」

一瓶の目薬り母も子も使い

選者は私を川柳に引入れてくれた、和田玄水君、もう既に故人になっている。

柳誌は本田渓花坊師の「大大阪」

昭和二年二月の松屋町の実費診療所の研究会で抜けたから多分同年三月か四月と思う。柳誌はもう、無い。

この研究会で、山雨楼さんや、庄万よし、松川青影子、下田のぼる、小須賀幽香諸氏等の先輩と顔を合わせていた。

抜け殻になっても、まだ川柳にしがみついてる変人が私です。

岩本雀踊子

故白柳さんに川雑の句会に誘われて川柳をまだハッキリと知らぬ私が出席する事にした。会場は「端之坊」だったように覚えている。句を書き残さぬ私が四十数年前の入選句を選者が路郎先生だったので覚えている。時は昭和四年頃、兼題「垢」

陽を背に足の垢見る病上り
襟垢もつけづに子供死んでゆき

その時の私の雅号が「鬼丸」呼名した声がうわずっていたのを今だに忘れられない。

川柳から遠ざかって二十年近い或る日、白柳さんから句会に出てこいと手紙をもらった。会場の天王寺の慶澤園に出かけた。そこが路郎先生の一周忌の句会場とは知らなかった。柳縁の強い、連りを知り本格的に川柳にカムバックしたのもそれからである。暖い柳人皆様の御交友に励まされ二十年の空白を少しでも埋めようと作句に精進しています。

八木摩天郎

親類のあの娘この娘と母の指
芸術よ親類なんか気にしてて

昭和六年一月始、堺市立公民病院事務長として赴任された路郎師に〝川柳の手ほどき〟を受けるべく、堺市は白鳳二年（天平時代前期）に既に都市の形成をしていたとの口伝に則り『白鳳川柳会』と名付けて市会議場で川柳会を開いた昭和六年八月の路郎師出題路郎師選、掲載柳誌は勿論、川柳雑誌八月号の入選句、私の処女作二句で恥かしい句ではあるが、私としては忘れられない思い出深い句である。

路郎師は四十八歳、私は二十五歳の時の出合いの頃、共に若かりし頃であった。私には母も居た。千本通の麻生家にも河盛純子さんが女学校に入ったばかり。堺市役所を辞めたO・Bで、その白鳳川柳会時代の人々と交際し、交流しているが、未だに川柳を作句しているのは私だけ……いつも心豊かに、生き甲斐を川柳に持ち続けているのは、私一人と云いたい気もする。

芸術よ親類なんか気にしてて

その頃は、ストリッパーや女が裸体のモデルに勇敢に進出する時代であった。句のヒントもそんな所から……思い出すままに。

吉田水車

活字になった処女作としては昭和七年一月に大阪時事新報の柳壇に入賞、新聞を六カ月読ませてもらったとかサンデー毎日柳壇での水府選へ投句したものであろが、やはり本格的に柳誌に発表されたのは川柳雑誌昭和六年四月号に路郎先生選の「近作柳樽」で入選した

犬ころも歩道へ着いてホットする

当時の号二朗であるとおもう。句の意味はご覧の通りであるが、その頃から交通事情も漸く輻輳のきざしを見せ始め、犬ころさえも車道から歩道へ上ってホットした表情で後ろをふりかえった。という単なるスケッチである。場所はたしか大阪の堺筋のどこかであったように記憶している。現今の堺筋と比べてはそれでもまだ春風たいとうと言った感じであったものである。私としては一流誌で活字にされたものとして、また句趣の前後のさまざまを想い起して、まことになつかしい限りである。因に右「近作柳樽」欄には没食子、いわを、喜由、諸氏の名の見えるのもまた感無量と申すところ。

若柳潮花

水客、紫香両君の誘いで「川柳雑誌社」麻生路郎先生選の「近作柳樽」に投句を始めたのは昭和十八年の新緑の頃だと記憶している。川柳としての一流柳社であり、選者また川柳の名人と言われただけに、投句をしても気持ちが落ちつかず、柳誌を手にして一句入選を此の眼で見た時の嬉しさは忘れられなかった。

売られゆく西瓜車の座をころげ

である。一句入選組から三句入選組までの私は川柳気違いと言われる程努力した時代である。先生より不朽洞会入会を推めて頂いた時は夢ではないかと思った。川雑不朽洞会と言えば柳界では格式の高い会であり、私などの入会を許されるものではなかった。其れより葭乃先生と川雑婦人「友の会」を創設、女流作家の養成に馳け廻った。処女作と共に忘れられない喜びは水客、紫香、潮花と同年同月不朽洞会に肩を並べて入会した事である。

黒川紫香

子供等は蛙の腹をうれしがり

たしか昭和十二年頃麻生路郎先生に選んでいただき「川柳雑誌」に発表されたのが、私の本当の意味での処女作と云えましょう。それまでに水客、潮花君等とあやし気な謄写版刷りの文芸誌を出したり、少年雑誌に俳句か川柳か判らぬものを投句したりして居ましたが、水客君のすすめで大鉄局畔柳社で作句していた頃、麻生路郎先生に拾われて「川柳雑誌」に投句しかけた頃の作品です。

今から思えば幼稚なものだと思われますが先生に選んで貰ったと云う感激と若さから来る初心さで一途に川柳作句に打ちこみました。程なく三人揃って不朽洞会員に入れて貰い投句は勿論、句会にも欠かさず出席して麻生路郎先生の薫陶を受けるようになりました。

そして生まれた当時の句は

戸を開ける音さえ違う長女次女
番号をつけデンデン虫を庭へ捨て

長野文庫

昭和九年一月号「ひかぶら誌」（愛媛県松山市）の募集題「船」の天位になったのが、

鉢植の土嗅いで見る船の旅

選者、得井双葉氏の選評に

「作者の細心な努力、川柳はかくありたいものです」とある。

これより先に、前田伍健選

酒の席友の意外な過去を知り（雑詠）
娘まだ話のままで年をとり（〃）

酒井大楼選に
婚約の噂もあって縫っている（題、婚約）
白石大観選に
一枝を襟に土産の紅葉狩（題、紅葉狩）
岡田麦舟選に
懸命に正直者の申し訳（題、懸命）
何れも昭和八年の作、ひかぶら掲載、
更に、もっと前に（昭和七年）謄写印刷されたものに、渡辺暁意選で

名城の裸になって親しまれ

（題、今治風景）

がある、一枚刷りの句会報で月は不明。

伊藤茶仏

その紐が解けていますと言い寄られ

選者は、山香美兎月（現在の山上千太郎）発表誌芦城川柳社「ねこ柳」第三巻第六号（猫柳三周年記念号、昭和四年六月発行。

故人の野村松水さんに誘われ、句会に出席したのが初めで、全没は覚悟の上だった。結果的には、この一句が抜けた。週刊朝日に、ローカル色を投稿していた頃で、川柳欄を読み噛って、俳句とも川柳ともつかぬ句を作った。「思芥郎」のペンネームで発表していた。当時、朝日柳壇に、「芥郎」のペンネーで、私の好きな川柳作家がいた。私の本名繁之をもじって「思芥郎」を「シゲロウ」と呼名することにした。ところが、「シカイロウ」と呼ばれて閉口していた。民謡の選をされていた、野口雨情先生からも、改号を暗示され現在の「茶仏（さぶつ）」を雨情先生からいただいた。昨年若本多久志氏に、近江国信楽の地に茶仏観音が安置されているお便りを（写真まで添えて）いただいた。ここで詳細を書く紙数がない。後日信楽に茶仏観音を訪ね、若本さんのご厚意に副いたい。

落合思月

喧嘩した後の電気が明るすぎ

大正十二年二月十一日、石川県金沢市の北国新聞柳壇で、選者は窪田銀波楼先生です。

当時の北国柳壇は、故安川久流美先生を筆頭に、私の恩師倉部東雲、二口句三味、北山耕人庵、桜井六葉子、中柳二郎、中川喜花、現在も活躍して居られる。高木鈴の家氏等々強豪がひしめいて居られ、恩師に進められて五句投句して、一句活字になりました。

清水白柳君と近づきになったのも、その直後です。同年七月井上剣花坊先生初め田中不倒人、三浦太郎丸、早川右近、古谷盆光、島田娘々奴、伊藤宵雨、河原塚可女氏等の歓迎川柳大会に出席「会場金沢商会議所」剣花坊先生の兼題「顔」に、入選して感激しました。

当日の三才と軸吟を御参考に

人位　争れませんと顔を凝視する　一紅
地位　停電に煙草吸ってる鼻が見え　不倒人
天位　人形師異人の顔も一つ置き　右近

軸吟　剣花坊

鷲に似た鼻腦肭臍に類した目
不開の間あけて目鼻のつかぬ顔

河村日満

金時も熊も蹴飛ばす初節句

課題吟「節句」での天位、選者は松尾小女郎氏で昭和十二年五月頃。満洲日々新聞柳壇欄、と書いてみたが、さて本当に満洲日々新聞であったか、また五月だったか、となるとやはり頼りない。しかしその他については間違っていない確信がある。

但し、号は「日満子」であった。

岡崎祥月

私は九歳にして父を失ったため十四歳で丁稚奉公に出ました。川柳を作ったのも十四歳の時です。茶町川柳会と言って十数名の川柳家で結成していました。私は文房具卸商の店員として朝は七時頃より荷物発送、荷造り等、忙しく日に三、四回も大八車を引っぱって汽船場まで行き、投げた荷物をもう一度見て安心して帰ったものでした。其の折実感句として出来た句が処女作です。

桟橋で投げた荷物を振り返り

が天に入選しましてそれから川柳に興味を持ったものです。発表誌は「やくも」でして選者は其の頃、松江番傘の重鎮宅和喋朗氏でした。

大正十四年五月十日夜木村三雷波（現松江番傘会長）宅で句会をした時でした。私としても今尚誰にでも誇れる名句と思っています。十四歳でこんなよい句が出来たと現在の

句と比較して恥しいくらいです。実感句は優秀句が生れるものです。今でも空想をさけて実感句に生きています。

大鶴喜由

一ぺんは下戸と添いたい気にもなり

句の意味は読んで字の如く、この頃よく飲んだ僕が、新妻の心の中はこうではないだろうかと句にしたものだ。

昭和二年の頃、大阪日日新聞柳壇の選者指田春彦先生が句会を催された。それに招かれて入選七句の中の一句である。初めて出席した句会だけに印象深いものがあった。川柳柳の窓は其の日から生れ、大阪に三つ位の支部が出来た。陽気亭、沐天、狂雨、小六、鴻堂等の同人を覚えている。

これが病みつきになって此処に約二年間、次に本田渓花坊先生の絵日傘（後に大大阪）を三年間、次に麻生路郎先生の川柳雑誌から引続き中島生々庵先生の川柳塔に至る次第である。

戸田古方

小児科は母が診察うけるよう
振袖は泣くも笑うも袖でする
喜怒哀楽さてめいわくなお月さま

掲載誌は川柳雑誌昭和十三年下半期のどの号か。戦災で焼いて、戦後苦心して集めましたが、肝腎のその頃の雑誌が入手出来ないまですので。記憶には間違いない積りです。選者は路郎先生。各地柳壇、松阪倶楽部欄。

生れて始めて作ったのが、この松阪倶楽部の路郎先生御指導の川柳講座に上った日。洒落や奇智だけが川柳だとばっかり思っていた私の頸に綱をつけて引っぱって下さったのが生々庵さん。そこで「人間陶冶の詩」だと、先生によって開眼さしていただきました。

前の二つは、見たまま、思ったまま、これが川柳かいな、と半信半疑の真似ごとです。最後の「月」の句は、その後詠史「川柳世界史」に拾い上げ、手書きの古方句集にも入れております。

不二田一三夫

大正末期には、映画雑誌や映画館のプログラムへ書きまくっていた。昭和になってから二ページ書くと十円呉れる映画雑誌社があった。封切館が五十銭で鰻丼が二十五銭の時代である。書いて金を貰うことを覚え、懸賞金が魅力になった。それからは週刊朝日・サンデー毎日・新聞や雑誌の実話ものを稼ぎ場にしたものの二百円、三百円という大物には手を出さなかった。—それほどウヌボレの強い男ではゴザンセン。

そんな頃、講談倶楽部では年一、二回、短文芸の募集があって、各部門に一等五十円ランパツしていた。こいつを一つとれば一カ月めしが食えた。

昭和七年十一月号の川柳の部に佳作として久良岐選、題は「映画」

—**紙芝居弁士のなれのはてがやり**

（トーキーの出現で活弁の転向者激増）

この句を見ると「なれのはてがやり」という古い川柳語を使っているので、川柳らしきものはその以前から作っていたようである。

この佳作組には、現在も活躍中の大家が数氏顔をならべておられるが「時の川柳」主幹・三条東洋鬼氏の作品は

—満洲の赤い夕陽へ鍬をとり—だった。

第18回近県川柳大会

▼日時　9月7日（日）受付9時より出句締切12時
▼会場　竹原福祉会館（閉会予定16時）
▼兼題　母・太鼓・爪・約束・坂・眼鏡・音・二人・命（各2句）
（特別課題・当日1題）
▼会費　800円（発表誌、軽食ふくむ）
▼表彰　広島県知事杯、学生賞ほか20位まで贈賞
▼投句締切　8月31日まで—用紙は巾4㎝長さ19㎝、裏面に雅号。三百円（切手代用）同封されて〒725竹原市竹原町田中　山内静水あて
▼主催　たけはら川柳会
（静水氏がご病気の通知を受けております。大会成功へご協力のほどを—）

竹久夢二が尊敬していたという鏑木清方画伯のカット

I

河野春三

―前略―五月号の後記で大兄が竹久夢二の生家と、郷土館のことを書いていられますが私も明治生れの人間として早くからの夢二フアンで、戦前は古本屋をしていた関係もあって、夢二の著作初版本の完本をほとんど蒐めていて珍重していたのですが、戦後食うに困ったとき、他の明治大正の稀覯文芸本とともに手放してしまいました。

生家と郷土館はここ三、四年の間に二回訪ねました。吉井川をバスで渡り田舟の浮かぶ小川ぶちを生家に行ったことを思い出します。生家の葡萄の棚も古びた籐椅子も忘れ得ません。

西大寺は川柳人としても寺尾俊平や時実新子、窪田久美子らが学校へ通ったところで、その辺りも歩いて見たことです。

夢二の墓は東京の雑司ケ谷墓地にあり、これも十数年前、二三度詣で、「竹久夢二を埋む」とか、ある小さい墓が、漱石のデッカイ墓の裏にあったこと思い出しました。

有本芳水は「少倶」でなく「日本少年」に間違いありません。私の記憶では松山思水が編集者だったかと覚えていますが、芳水が編集者であったかも知れません。記者がみな水・の字をつけていたのが印象的です。

「日本少年」は実業之日本社から出ていて、僚誌として「少女の友」がありました。

芳水と夢二は同郷のよしみもあったのか、芳水詩集も勿論夢二の装訂と挿画であり特にカバーの黄色い紙に印刷された夢二の多感な少年の図柄はすばらしく、私も高槻へ来るまでは本棚の隅にありましたが、多分引越しの際、大部分の書物を古本屋へ整理したのでそこへまぎれ込んだものらしく目下手許にありません。

私は「日本少年」から、春陽堂発行の「中央文学」に進み、（文章世界や文章倶楽部にはついてゆけず）これも夢二の表紙絵に惹かれたのでしょう。

中央文学の若山牧水の短歌欄に投書したのが文芸に手を染めたはじめで、程なく牧水のハガキをもらって、「創作」に入社したのでした。

あなたの後記を読んでなつかしくて一寸したためました。

○

「風」6号十二日頃出来ます。清水正一さんの「詩人寄席」中席が載りますので、出来ましたら貴兄へ御送りいたします。

御身おいといの上、御健斗下さい。

―後略。

（高槻市竹の内町二二―一「風」主宰）

II

堀口塊人

「川柳塔」毎号御苦労さま。芳水先生は、「日本少年」です。「少倶」とは関係ありません。少し時代もズレています。

芳水先生が実業之日本社の都合で「日本少年」を去り「実業之日本」経済記者有本歓之助？　となられたことについては子供心に悲しく、ひそかにフンガイしたものです。

ついでながら少年期から思春期までの小生が愛読したものは、有本芳水、押川春浪、碧瑠璃園、大町桂月、巌谷小波、久留島武彦、葛原しげる、村上浪六等でありました。詩歌では啄木、晶子、川柳はもちろん知りませんでした。

姫路市飾磨の町中の神社に芳水詩碑がありますが、今となっては知っている人も少ないでしょう。

私の故郷若狭を詠んでくれたのは明治時代でした。

—**夢二逝き芳水隠れ浜の詩碑**　塊人

（西宮市高松町三番四—三号・川柳文学社・主幹）

女シリーズ（3）

菊沢小松園

手の込んだ嘘を女は受け附けず
人のみちが小さく見えてくる女
夢の中女はすでに脱いでいる
後遺症女はあっち向いたまま
阿呆らしくなって泣くのをやめにする女
じたばたするな女の方はそう行かず
女の嘘を追うて稼いでる原稿紙
鉄溶かすちからを女持ちあわせ
人並の恋もしてます顔の籠
身をくねらせて女素直な生れつき

両先生からのお便り

不二田一三夫

五月号の後記に、竹久夢二先生や有本芳水先生のことを少し書いたところ、河野春三先生や堀口塊人先生がすぐお便りをくださった。

ぼくの知らないことや思い違いを教えてくださったのである。

本誌でも大半の人が興味を持っておられることなので、両先生のおゆるしを得て掲載させていただくことにした。

岡山県邑久町の岡村久志良氏のご案内で夢二の生家などを見せてもらったことは五月号に書いたが、帰阪してから本棚をひっくり返えし、大正十五年十二月刊の「童謡・凧」や昭和十六年一月刊の「雑草」（詩・日記・断片・短歌・俳句・短篇など）や「三味線草」に「有本芳水詩集」を探がしだした。

このほか昭和四十六年一月、大阪そごう百貨店での竹久夢二展で買ったものや、久志良氏から以前送っていただいた、細野正信著「竹久夢二」などを一応まとめて一カ所に置くことにした。

ぼくはご承知のように詩人ではないが、二十代のころ「尖端」という同人誌を出したことがある。印刷が本職だったので値段のわりに豪華？　本だった。「酒は涙かため息か」の高橋掬太郎氏がまだ函館日日にいた頃だが毎号詩を送ってもらっていた。（映画誌で結ばれた仲だった）

話がとびとびになって恐縮だが、ぼくに編集技術を教えてくれたのは、衣笠貞之助氏に乞われて松竹下加茂撮影所で宣伝部長になった久保田たつを氏である。その久保田氏が師事していたのが秋田雨雀先生だった。（雨雀原作の「埋もれた春」の舞台装置を夢二が担当した。また雨雀と共に講演旅行もしている）だから久保田氏も夢二ファンで、映画誌の穴埋めに詩を書いていたが、いずれも夢二調だった。雑誌のカットも夢二ばりに描いていた。そんな影響からぼくも〝尖端〟に夢二調を真似たり、カットも真似をした。

さて、「三味線草」だが、表紙も奥付けも破れているが、年譜によると大正四年九月刊行とある。夜店の古本屋で買ったものだろうが、「有本芳水詩集」となると、それよりも古いようである。これも表紙や奥付けが破れていて漢字にはルビがついているし、紙が狐色に変じ、それがまたカビくさいのも読書狂にはこたえられぬ魅力がある。

両先生のほかに服部明陽軒氏からも「日本少年」の歴代編集者などを教えてくださった。

嗚呼　永尾英断！

小西　無鬼

五月八日夕方、大阪駅前での交通事故により北区浮田町の行岡病院に入院、意識不明の儘、十日死去とのハガキを不二田一三夫氏から戴いたのが十二日午後の配達便であった。恰も勤労ストと日曜不配の為だろう。

実は十日朝八時過ぎ「永尾ですが」とて、交通事故にて意識不明のまま今朝二時に亡くなりましたと云う電話を貰った。葬送日時未定との事、今日は「ささやま句会日」出席者に伝える事とし、句会諸準備を打ち合せ依頼中板尾岳人氏より架電、ストで電報が打てぬので本社よりの供花等よろしくと。この時にでも大阪で英断自身の事故とか、入院して居るとか判って居たら、色々執るべき処置があったのにと今更自分を責める。

句会出席者に「英断のお父さんが交通事故に遭い今朝二時亡くなられた、葬送日時未定の由と発表した。八十幾才のお父さんがあり、交通の激しいお宅の前での事故だろうと早合点の僕を悔むばかり。

憶うに永尾英断君が我々グループに参加して呉れたのは、川柳雑誌社篠山支部として川柳大会を孔雀会館に麻生路郎先生御夫妻と本社幹部の諸先生をお迎えして開催した昭和三十一年春、桜花満開の頃と心得る。爾来現在に至るまで指導者として選者として無くてならぬ人として会員の信頼は殊に篤かった。

又国鉄川柳に於ての東奔西走の活躍振りは衆知の通り。川柳雑誌時代より引続き同人として協力を惜しまぬ柳人だった。鉄道人の句集刊行に当っては販売を一ト手に引受け、篠山句会へもよく持参し残部があれば、読んで下さいと渡したり兎に角責任感強く、人の為に一と肌も脱ぐ友情細まやかな人情家。

日記を繰っては、この日は此処、この日は何処と駈け回り、ささやま句会出席のやりくりをし、月の内三、四日しか自宅へ帰れませんねと話して居た英断。

数年前に慈母を喪ってからは、追善供養の為八十八か寺は勿論各地観音詣りを発願、勤務終えて夜行列車で寝て、未明雪の山路を昇る等本職の僧に劣らぬ苦業を積むも亡母への供養。眼をつむれば御示顕が浮ぶ修業人だった君。何かの話の時永尾家は△△城主村上氏の血を引いてるんです元士族で、と聞いた事がある。代々の秀才揃いであり、エリートコースを歩む方達である。

この人の為にはとか、男が一旦引受けた以上はとか、この事の為にはと決すれば己を顧みずひた向きに動く。こんな事も血は争えぬと云う事かも知れぬ。

人間として多くの学ぶべき処を備えた男、英断だったのに忽然と消ゆ、惜しんでも悔んでも既に手の届かぬ所へ逝った突然の交通事故。路郎先生の

「ふるくとも僕には仁義礼智信」の句を全く身につけた人だった。茲に英断の遺句若干を掲げ、昨日を偲び追悼す。

遺　句　（川柳ささやまより）

風に乗る鈴を頼って夜を歩く
読経さえリズムに乗る日乗らない日
雪の冷え靴底にあり経を読む
死がそこにあるのも知らず薬飲む
苦しんだ顔でなかっただけ取得
信仰の誰かが踏んだ雪を踏み
満願へ首のタオルは凍てたまま
杉からの雨が傘打つ遍路道
一ン日人に会わない道歩く
人間の価値を葬儀の花で決め
透き通る緑の中の風の寺
せせらぎの音と登った月輪寺

振り返る道も時雨るる杉の寺
しみじみと地酒の味も一人旅
満願の疲れが飲めぬ酒にする
義理の酒なら斗酒を辞せぬ英断と気の合う私

西成詩人 章雅氏逝く

不二田一三夫

—前略、いつもお世話になっておりました父、今西章雅（本名頼光）は、五月二十八日肺閉塞により急死いたしました。

六月句会の案内を戴き、父も投句を楽しみにしていたと思い残念です。

ここに生前のご厚宜にあつく御礼申しあげます。素人の編集ですが、好きだった川柳の句集でも作ろうと考えています。とりあえず御知らせまで　草々

今西崇浩

六月二日、ご令息からのハガキでこの悲報を知って驚いた。もう十数年もの長い間、お会いしていないが、健康そうな人だっただけにあまりのことに正に驚きだった。

章雅さんは薬剤師なので、以前は生薑（しょうぎょう）という雅号だった。これは生姜の漢方薬名から俳号につけたらしく、それを川柳的に「しょうが」と読ませていた。

その後、当用漢字から嫌われ同一発音の章雅に改号、今日に至っていたようである。

章雅さんは西成区山王町で薬局を開業しておられた。この近くに故木村十悟、伊達堰子という須崎豆秋一門が住んでいたので川柳を薦められ「川雑支部・あべの句会」へ熱心に出席していたのを、昭和35年6月、不朽洞会々員へぼくが推薦した。

—川柳は人間の愚性を追求する十七字詩」というのが持論だった。そしてその呼吸がそのまま彼の句になっていたようである。

山王町といえば、かっての遊廓「飛田」のあたり、したがって発表される句には、カスにポツリと言った。「僕胃潰瘍や云われてまんネ」と。

諡は「栄春院鉄眼道信居士」と。　合掌

バ西成の妖気がただよった。

明治40年1月2日生まれというから、尼緑之助、本田恵二朗、正本水客、岡村久志良諸氏やぼくと同い年である。まだまだこれからの年だけに、その急逝は惜しまれてあまりあるものがある。

どなたかにこの追悼記事を頼もうとしたがサテとなると、十数年間会っていないのでそのへんのことが判からず、ぼく一人で書くことにしたので、氏の全貌をお伝えすることができないのは残念である。

非常な多作家で、本誌以外数誌にも毎月投句していた。どっちかいえば本誌一本にしぼって句作にはげんでいたら、もっと個性のある句が遺ったのではないかと思っている。

川柳塔人は「花」がお好きで、おそらく全国柳誌中〝花の句〟の一番多いのは本誌だろうと思っている。「短冊に書ける句」というのが川柳塔流だとすると、魚住満潮氏や西川晃氏など、いわゆる〝西成派〟はちょっとマゴついたのではないか——そんな中に章雅さんも存在していたとおもう。

川柳塔になってからは壁につきあたったらしく、章雅さんの本領の句が出なくなったのではないか。彼の血である「西成」の、それらが騒がなくなった。と考えるのはぼくの思いすぎだろうか。

いま七月号の編集中で、氏の生前の句を川柳雑誌と川柳塔から抄出しているのだが、ゆっくりさがす時間がない。ざっと目を通してみたが、やはり「川雑」時代の方に彼の心が

こもっているように思い、大半は川柳雑誌から抜いたことをおことわりしておく。

章雅句抄

不朽洞会々員デビュー作（路郎選）

異状なし軍歌口調の守衛なり
出発が羽田と聞いてちょっと妬け
三本の映画に合わす閉店時

秀句鑑賞の二句（路郎選）

将棋倒しこらえた女の固い肘
女社長ゴルフで尻を振ってくる

「川柳雑誌」時代（路郎選）

こぼれそうなおなか抱えて捨てられる
一瞬のさもしさ賽銭箱覗き
情婦（スケ）とヒモ赤が男で茶が女
総評に変っただけの釜ケ崎
つぼんでも貰える方へ顔を向け
真因を語らず被害者脈がきれ
ぶらんこが通天閣を蹴っている
丹前で立ち会い演説覗きに来
紅一点という時の女凛として
日本間敷居の隅へへり下り
うなぎつかむ呼吸も知らず株を買い

「川柳塔」

オブラートに包んでノドにひっかかり
戻らずに義弟の妻となる覚悟

大阪山陰 交流隠岐吟行

吉岡遞児

水若酢神社内八百杉の前で栄氏と花梢さん。

昨年、路郎忌に出席した折何となく誘いをかけたのが今回の隠岐吟行の発端であった。員数からみると多数とはいかなかったが、総勢二十有余名の精鋭作家の集いとなった。

五月二日朝、米子着の大阪勢を迎える。都会で参加の出来ない地元の千代、瑞枝、花子の佳人そして出雲の緑之助、独仙の両氏も駈迎えは生っ粋の隠岐っ子である安部、松浦両先生であった。こうした遠流の島隠岐でも川柳に繋がる縁の綾の交りがあったとは、しみじみと心に染みる一幕であった。昼食後いよいよ本番である史跡めぐりに車上の人となる。行程のはじめは玉若酢神社に纏わる縁起、かって国宝であった日本最古の駅鈴、そせ参じての心暖まる交歓風景が展開された。七類港で乗船、前記諸氏とお別れの七色のテープは出帆のドラとともにつぎつぎと切れていった。西郷港での出して隠岐倉印等々古代隠岐の秘められた歴史の足跡を見聞する。次いで水若酢神社の隠岐造りと称される社殿、郷土館へ立ち寄り民俗資料を見る。たまたま附属舎では隠岐しゃくなげの展示会が催されていて散策する私たちの目を慰してくれた。

行程第一日のハイライトは白島遊覧であったが折悪しく小雨模様に禍いされ硝子ごしに見る島めぐりとなった。当日最後は国分寺と隣接の行在所であった。同寺で住職から後醍醐天皇流刑の悲史と廃仏騒動で焼失の憂き目を見た同寺の変遷を将に立板に水のごと聞かされ元弘の昔を偲ぶよすがとした。第一夜の泊りは国民宿舎島の湯荘、四囲を山に、海も

見渡せる高台に落ち着いたたたずまいであった。一風呂浴びたところで夕べの膳、前記の安部先生に加えて隠岐高校で川柳の先生で知られる田中登志先生を交えてささやかに宴となる。無論新鮮な魚介を盛った膳部は平素味わえぬ味覚、更に隠岐民謡の数々は馳走の味わいを倍加して余りあり好評裡に終宴、隠岐吟行第一夜の夢路を結ぶにこよない一日が終った。

昨夜半からの降雨に二日目の別府への航路は気が重かった。別府上陸を機に雨はますます激しさを増した、折角の黒木御所の参拝もそこそこに二泊目の宿シーサイドホテル鶴丸のロビーに腰を下す。昼食後、天の配済も好ましく雨が上り予定のコース国賀遊覧の船客となる。海から見る島々の景観に竝せ老船長の錆の効いた声音によるガイド、はては海の男の聞かす隠岐民謡は船縁を叩く波濤の調和を得て旅情は最高、中でも三百米になんなんとする摩天厓を仰ぎみるに至っては言う言葉を知らず、の感をそれぞれに灼きつける。夜に入りホテル側の好意による本場のしげさ節あるいは踊りに地酒の酔い心地も満点、その上に漁りたての大鯛の活きづくりときては何をか言わんの境地、将に隠岐は絵の島花の島であったし、人情も細やか、色白でキメ細やかな美人も散見できての嬉しい叙情の島でもあった。惜しむらくは天候による空便の欠航と小松園先生ご夫妻のハプニングによる不参加が心残りとなった。

老人福祉会川柳

市川　鱗魚

麻生路郎先生の著書を教科書にしての老人ばかりの川柳講座の作品です。

毎月、月二回水曜日に出かけていますが、最近はやっと見られるような作品にぶつかることがあります。七十代の人が多いのですがその熱心さには頭がさがります。

入選句

無料バス運転手にも礼を言う　八重
稚児いとしカメラへ向いたおちょぼ口　忠衛
それからが言えぬ拳を握りしめ　清明
天気図は雨用心の傘も母　はじめ
施設の子達にうれしい鯉のぼり　繁男
天高く夫婦で泳ぐ鯉のぼり　すゑ
選挙戦さくら便りも済んだ街　須磨子
梅の花緯度に素直な花便り　やゑ
卒業の窓にさくらが咲き初め　つね
程々に女房を叱るきれい好き　好史
日本の誇り五月の鯉のぼり　雪子
勘違いした伯母さんの長話　ツタエ
鯉のぼり五月の風に酔っている　初江
勘違い降りたは二つ過ぎた駅　和子
何事も無かった母の仕まい風呂　秋花
軽るく言う医者のカルテが気にかかり　翠山
朝の靴妻は手綱をゆるめない　六条
ね込まれて知った女の忙しさ　豊三郎
裁ち鋏尺と糎の勘違い　静枝

一分間の柳論

河原　みのる

川柳は信仰である。と気負ってみても短文で詳述する事は出来ないが、先ず第一歩として経典、聖書にも比して柳書、句会誌等は言うまでもなく、たとえ没句箋たりとも今一層大切に扱うことからはじめるべきとおもう。自己陶冶、社会裨益を目指す川柳は文字の遊びではない。凡句と雖も魂がある。

木に竹を接いでシャボテンを咲かせたような句が横行する、それはその人なりで良しとせんか、但し迎合して二刀を使う輩もちらほらするに及んでは沙汰の限りというべし。

新人開拓？とはオコがましい言葉であるがお会いする方がたは殆んど川柳に関心をもっていられ、川柳はおもしろいがむつかしそうだとおっしゃる。川柳が人口減に低迷している原因は奈辺にあるか一考を要すると思う。

自然を詠んだ無季川柳が流行り、人間を扱った俳句が幅を利かしている。だがやはり菊は鉢、ゲンゲ草は野に、コブシは遠く山に見るべきものではあるまいか。

夏祭り

福浦勝晴選

肩車で夜市を見せる夏まつり　暁明
陽が落ちてから本番の夏祭　可住
食中毒の記事もでていた夏祭　里風
夏まつり更けて湖畔に風が出る　登美也
寝苦しい飯場の夢の夏祭り　武雄
初めてのゆかたが嬉し夏祭り　道子
Uターンする気になった祭舟　一風
水打って神輿迎える夏祭り　伶人
留守番はコンチキチンを聞いて飲み　国彦
舟渡御を橋の上から拝んどき　一郎
飲みかけて肌脱ぎになる夏祭り　バット
夏祭りヘドロの川に散る花火　魚山
ロングスカートゾロリ〳〵と夏祭　七面山
踊り娘の輪を夕立ちが来て崩し　洋々
ふんどしは男に限る夏まつり　福水
村長の法被が似合う夏まつり　白水
涼風が祭りの跡を吹き清め　漫柳
褌のゆるいのもいる夏祭り　香珠夫
祭りの灯消えて氷屋まだ稼ぎ　露子
夏祭り素肌も触れて恋も咲き　秀峰
ふる里の祭りをビルの上で飲み　春日
夏祭り裸同士で飲み初め　暁風
アセチレンの香をなつかしむ夏祭　どんたく
夏祭り秋はあなたとなるお客　千翁
夏祭り神輿は半ば沈まされ　ろ亭
東北の夏祭り追う空の旅　貞祐
双肌をぬいで真夏の太鼓鳴る　たもつ
夏祭り身重の妻の息づかい　素身郎
献灯の蔭で落合う夏祭り　本蔭棒
夏祭りデートは別の森でする　与史
青田風幟はためく夏祭り　近江
涼しさを呼んでる屋台の夏祭り　保夫
浴衣着た市長と出逢う夏祭　弘朗
お神輿にぶら下るのもいる夏祭り　不二
そうめんに郷愁が湧く夏祭　悠泉
拾銭で金魚掬うた祭の夜　カズエ
うすものを女気にする夏祭り　祥月
夏祭り蜘蛛の子ちらす俄か雨　古心
夏祭り去年の汗のシミ消えず　伊津志
掛小屋を団扇でのぞく夏祭り　代仕男
お揃いのまといがかつぐ夏神輿　〆女
夏祭り弁天さまも裾からげ　いわを
馬車馬の父が浴衣で飲む祭り　梁水
浴衣着て妻が若やぐ夏祭り　肖二
座がひけて役者も踊る夏祭り　綾女
着流しでひょいと出かける夏祭り　昌道
人
鉢巻を締めた法被の子が眠り　木魚
地
夏を呼ぶ祭へ風が歌い出す　凡九郎
天
夏祭りことしは居ない灯をともす　克枝
軸

少年

奥谷弘朗選

エロかテロか気になる祭りのサングラス
少年期ふくらむ夢を育てたい　紫宏
直線へ少年の瞳たじろがず　重人
少年の大志は駅で補導され　昌道
少年に映る世界が別に有る　凡九郎
少年の大志教育ママが決め　茶人
母の無い少年が画く母の顔　克枝
少年期母は無口を淋しがり　紘
一段と声際だって少年僧　近江
少年が紙をはみ出す虹を画く　肖二
ハイという少年工の故郷なまり　梁水
逆境に負けまい少年海に佇つ　〆女

一行詩型研究
『対流』　季刊4号　〒共三五円
「一行詩型の原点摸索・山村祐」と、「句をめぐる史的断想・津久井理一」のほか、柳俳の作品がならぶ。
―発行所　〒170東京都豊島区北大塚一丁目三三―一　森林書房

少年が朝を投げこむインクの香　竹馬
少年だから許せることと叱ること　綾女
少年の目が澄んでいる車椅子　国彦
少年に何にも言わぬ日がつづき　木魚
少年学成り難くする二浪　貞祐
美少年その行く先が案じられ　春日
少年は次の世代を疑わず　季賛
許さない少年の瞳が嘘捉え　宵明
知恵付けて少年工を誤らせ　バット
少年がと言えば大人と言う返事　七面山
かえらない金の卵にやきもきし　漫柳
親の道継ぐ少年の坐りだこ　香珠夫
少年のけがれを知らぬ瞳がきれい　悠泉
少年が瞼の母に寄せる思慕　露子
ペット飼う少年やさしい心持ち　祥月
少年の夢を虫ばむ都会の灯　古心
少年Aやっぱり親の無い子供　どんたく
少年の口はへの字に耐えている　千翁
デカイ夢抱いて少年鳩を飼う　里風
少年にテスト息抜く暇が欲し　代仕男
可愛気の無い少年が塾通い　松花
少年の目に不合理な世が哀し　魚山

佳

少年の憤怒日記の文字がはね　素身郎
鳩を飼う少年父の顔知らず　右近
面取れば茶目気振るまう美少年　軒太楼
少年の大きな声に嘘がない　弘生
少年の目に残った村が消え　可住

人

反抗期の少年尖るだけ尖がり　洋々

地

立直る少年Aに冬がない　白水
少年に奇麗な海を譲りたし　伶人

天

登っても登っても少年に山がある

軸

うなぎ

小西無鬼選

養殖のうなぎに暮し支えられ　悠泉
幸運はうなぎ上りのよう出世　暁風
庶民もうなぎ松茸遠く住み　正彰
遠く来て鰻土着の顔で獲れ　弘生
板前の指に観念するうなぎ　代仕男
フランスのうなぎ喰べてるとは識らず　いわを
もうなぎ上る水嵩見て帰り　可住
養殖のうなぎ受難の日を知らず　軒太楼
うなぎ屋の前で迷うてる市場籠　通子
うなぎにも運の良い奴悪い奴　一郎
うなぎ焼く煙換気扇へ素直　季賛
うなぎ釣りに興じて若い夫婦笑む　七面山
うなぎ屋に脂の初れた老い二人　福水
相伴の妻のうなぎは尻っぽだけ　漫柳
大籠にひしめくうなぎキキと鳴く　香珠夫
誘惑を鰻と逃げる夜の河　どんたく

執念をうなぎ鉄器でちちこまり　千翁
うなぎ屋の鉢巻うなぎを動かさず　ろ亭
大勢のうなぎ仲間と会う厄日　宵明
梅干しとうなぎが生きている明治　本蔭棒
養殖のうなぎに産卵歴はない　度
うなぎ漁当てにはしない市場籠　豊生
美味そうに鰻はどうも書きにくい　木魚
かば焼のケムリ公害だと言えず　保夫
世も変わり柳の下にいたうなぎ　近江
大袈裟にするから鰻あばれだし　無人
繁華街うなぎをひらくとこも見せ　重人
万病に八ッ目うなぎかつぎ出し　洛酔
丑の日が厄とはうなぎ腑に落ちず　梁水
うな重をペロリ若さにある追加　凡九郎
今喰われるうなぎうれしそうに居る　不二
うなぎ上り杓文字に怒り込めたデモ　茶人
うなぎ焼く匂いに慣れている隣り　綾女

佳

ググーッ確かに鰻引き戻し　みのる
縮むだけ縮み蒲焼となるうなぎ　魚山
水槽の隅で思案をする鰻　道夫
きも吸を添えてうな丼らしくする　肖二
うなどんを道でたのんで旦那くる　登美也

人

釣り糸を目茶苦茶にして小うなぎ　秋月

地

役得で腹の痛まぬうなぎ喰う　弘朗

天

なんだ隣だったのか「うなぎ」　素身郎

軸

魚籠持ちの逃げ出すうなぎ押え兼ね

初歩教室

題 ―「石」―

本田恵二朗

この石も居心地よいか苔むして　紘
（温く苔に宿かす庭の石）
少年へ蹴る石もなく道つづく　同
（よくできた。ご精進あれ）
石屋さん石と取組む鉄の意思　繁子
（老石工の心が石と通い会い）
庭石の苔をはがしてぼやかれる　濁水
（老石工の年期が石にさからわず）
石仏暑さ寒さも気にせずに　秀村
（庭石の苔をはがした不粋者）
運のよい石は山から床の間に　生仏
（石仏四季それぞれの顔で笑む）
わしの村まだ石橋が二カ所あり　同
（好運な石床の間にあぐらかき）
気は若く小石につまずく年を老い　ますえ
（うれしさは石橋がある里の道）
月の石宝石なみに扱われ　つね
（若い気の足を小石にあなどられ）
桜散る石の地蔵にはらはらと　同
（石仏に慕い寄るように散る桜）
石地蔵物価高にも痩せはせず　藤持
（不況風どこ吹く風と石地蔵）
石が浮き木の葉が沈む世の狂い　同
庭石の買われてのっそり腰を上げ　文子
石一つのけたら蟻の会議中　同
石仏をくすぐるように草が伸び　紀美代
（石仏の頬をくすぐる草いきれ）
雨がえる雨宿りする石灯籠　同
（雨蛙石灯籠で坐禅組む）
石仏と語ろう京の一人旅　道子
（石仏が囁きかける京の旅）
行く人の心は知らず石だたみ　同
親不孝詫びに墓石に散る桜　篤史
（親不孝詫びる墓石に桜散る）
捨て石が或る夜華麗な夢をみる　幸生
ビロードの苔着る石は陽を拒み　同
（苔を着て日陰にひそと生きる石）
石垣の一つの僕が持つ自由　同
石垣に苺の紅がしずくする　佐知子
これほどに理をつくしても石頭　同
墓石と語れば叱られそうになる　重人
大和路の石仏苔に歴史秘め　同
那智黒を磨く平和な老父である　同
石仏の頭を雀しばし借り　史子
反応が欲しくて石を投げてみる　同
（好調だ。ご精進あれ）
石畳老婆の貌も古都の彩　洋子
庭石にきりしまばらに色を添え　静観堂
石の下に白く眠る妻よ妻　同
投石の三ツ四ツ波紋競い合い　静子
（石投げた波紋に童心甦り）
石塔の歴史を苔に教えられ　保夫
庭ブーム川の奇石はみな盗られ　正則
（庭ブームに川の奇石がねらわれる）
石や苔だけでバス寄る京の寺　貞祐
（京の寺石と苔とでバスを釣る）
ガス入れたライター旅で石が切れ　同
（ライターの石が旅路で息切れる）
千鳥足上手に飛石渡ってる　三十四
（飛石を千鳥に踏んだ酒の足）
コロコロと蹴られた石に詩がある　本蔭棒
捨て石が陽の目みる日を待っている　慶彦
観る人々へ石庭何を語りたる　瓢太
（観る人の心へ石庭語りかけ）
奇岩怪石送迎せわし瀞をゆく　同
無意識に掴んだ石が武器となり　利美
前例がないと役所の石頭　同
けつまずかせて石ころの自己主張　道夫
石橋を叩けば渡れと言うてくれ　同
逃げ腰で宝石見ているウインドー　同
（この調子で前進しよう）
ヨチヨチの孫へはらはらさせる石　無人
たわむれの小石を蛙凶器と見　同
庭石の笑う日怒る日泣いてる日　サヨ
（貴女の心をいみじく読み上げた）
城跡の石は流転を物語る　弘生
（栄枯盛衰の涙に濡れる古城の石）
石積んで石積んで賽の河原です　同
（石積んで賽の河原の涙雨）
（石積んで積んで逝った児憶う宵）
石放つた波紋意外と大き過ぎ　静泉

（ちっぽけな石の波紋にハッとする）　同
石仏の慈顔に触れ得た日の温み
（石仏の慈顔に出会い旅が満ち）　静枝
碑文の風化たどって家系知る
宝石をためて女の夢があり　同
（宝石に女の夢を貯め続け）
石好きは石と無言の対話する　鎮彦
（石好きの石と対話をしてあきず）
石の湯に若い女体が透けている　日々子
ショウウインド宝石を見る女の目　同
（ウインドの宝石虚栄の目を奪う）
石垣の一つ一つが城の跡　落猿
（城の石一つ一つが歴史初め）
石一つ蹴って不満の帰り道　同
（石蹴っても消えぬ不満の帰り道）
石橋を叩いてみたがやめにする　紫宏
地蔵さん石のお顔があたたかい　同
（地蔵尊石とは見えぬ笑顔よし）
石畳踏めば歴史の音がする　翁童
つまずいた石に邪心をさとされる　同
一坪の庭にも石の生きる位置　度
流れ星地球に一つ石がふえ　同
もの言わぬ石につまずく物思い　伊津志
埋め込んだ石が旧家を支えて来　同
（がっちりと旧家支えている礎石）
石畳柳生へ続く青葉道　カズエ
ポケツから石ころも出る児のズボン　同
観光の人石臼をそっと撫ぜ　同
（観光に撫でられ石臼艶光る）
石段の高さにあわぬ荒廃寺　岳麓
（古寺の石段あわれずっこける）
石橋を叩いて好機取逃がし　露杖
（石橋を叩き過ぎたで機を逃がし）
名石展趣味と打算が入り交り　同
石地蔵の鼻欠けたる勿体なさ　誓二
（石仏の鼻もったいなくも欠け給い）
照る日も曇る日も庭石じっと耐え　同
（庭石の照る日曇る日耐え続け）
ストレス募り罪のない石を蹴り　同
（ストレスが罪なき石を蹴っている）
石仏と語る言葉たださがす　凡九郎
（石仏と語れば草が盗み聞く）
飛んで行く先は蹴られた石自由　同
（石蹴られあてなき旅に飛んで行く）
石投げて天地の返事聞いてみる　頼次
大石に太閤の一と声聞えそう　同
石一つ一つ拾いつ畑を打つ　天人
（精農の鍬は小石も見逃がさず）
庭石の最後の一個定まらず　同
（庭石のどこへ置こうかこの一つ）
名刹のへこみし石段踏みしめる　同
石やっと盗んでアポロなりひそめ　大成
（月の石盗んで人間どん欲な）
陽炎へ石もボケっと春の貌　同

題―夢―七月二十日締切（九月号発表）
宛先　倉敷市下津井一―九―三四　〒七一一
本田恵二朗

兵庫県文化祭県民川柳大会

▼**資格**　兵庫県在住者又は在勤者
▼**作品**　雑詠（一人一句）ハガキ使用〒番号、住所、氏名。
▼**締切**　8月20日（当日消印有効）
▼**あて先**　〒650神戸市生田区下山手通5―1　兵庫県企画部文化局内県民川柳大会宛
▼**席題**　二題（当日発表）
▼**講演**　（講師、演題未定）

（なお選者10名の内、当川柳塔同人（兵庫県・参事）小西無鬼氏が選ばれた。

川柳塔社常任理事会（6月4日）

9月14日開催の西日本川柳大会本社兼題選者は橘高薫風氏と決定。

ハワイ吟行の旅費が近畿日本ツーリストでは数万円安いとあって、柳宏子氏の紹介で同社員も出席、団長多久志氏に説明、その決定額は次号で発表の予定。どちらにしても数万円安くなることは確実のようである。

地域委員を新しく選出、西田柳宏子氏と野村太茂津氏。

10月5日の二賞発表と同人総会の会場は、上本町六丁目の教育会館になるか、上汐町の文化会館の予定。（次号で発表）

7月7日の路郎忌は以和貴荘で午後5時30分開会。講演東野大八氏の前評判上々。

出席―多久志・柳志・百酒・静馬・いわを・庸佑・生々庵・古方・太茂津・薫風・柳宏子・文秋・小松園・好郎・形水・万的・摩天郎・岳人・一三夫諸氏。

第二百八十八回（五十年度第六回）

大萬川柳

「花瓶」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　五百六十五句

入選　七十一句

洋酒瓶花瓶代りの独身寮　和歌山　冨江

名匠の花瓶野に咲く花でよし　倉敷　三林坊

造花差したまま花瓶ほっとかれ　松江　晃男

水の幸知らず造花と添う花瓶　堺　一二三

華道展花より花瓶競いあい　東大阪　美子

空っぽの花瓶が孤独に耐えている　大阪　智子

壇上の人の高さにある花瓶　大阪　誓二

春の花挿せば花瓶も春の彩　大阪　好一

飾りつぼ花の心は知らぬまま　富田林　花梢

散る花の哀しみ花瓶知っていた　八尾　夕花

下手くそに活けられ花瓶落ちつけず　堺　一舟

何流か知らねど花瓶も花も生き　松原　重人

贈られた花瓶吾が家に立派すぎ　和歌山　与史

花瓶にもつたわる客間のいい話　堺　千万子

花瓶までプラスチックの味気なさ　和歌山　としよ

花瓶今日花一ぱいのうれしい日　兵庫　可住

僕なりの部屋に調和する花瓶　守口　笑風

にせ物とわかって花瓶使われる　寝屋川　小路

OLの心が一輪ざしに揺れ　神戸　どんたく

一輪の演技花瓶に助けられ　倉敷　克枝

きれいでも花瓶造花が気に入らず　松江　登美也

置物の花瓶は花の香をしたい　大田　軒太楼

花ほめて高い花瓶は見てくれず　堺　天笑

さりげないバラ一輪に花瓶生き　松原　サヨ

満ち足りた朝を花瓶の水かえる　奈良　本陰棒

何焼きか知らねど花瓶美しき　和歌山　福水

回復期花瓶へ春を活けてみる　高槻　季賛

美しい花瓶に花も負けられず

変らない造花に花瓶も飽いてくる　大阪　文秋

花瓶にもそれぞれ四季の貌を持つ

懸崖に活けられ花瓶耐えている　大阪　君子

愛既に枯れたか花瓶に花がない

花瓶一つ男ぐらしにあるゆとり　大阪　柳志

花瓶とは所詮は花を待つさだめ

個性ある花瓶で花と妥協せず　大阪　弘生

観賞用にされて花瓶の孤独なる

華麗なる花へ花瓶のすこし照れ　大阪　一栄

床の間の花瓶旧家の格を見せ

お粗末な花瓶のバラが豪華すぎ　郡山　カヅエ

見る目ない客と花瓶は知っている

交番の花瓶善意の花匂う　尼崎　利美

病室の花瓶は花を絶やせない

気にくわぬ客と花瓶も思ってる　和歌山　道夫

野の花のうれい花瓶だけが知る

たくまない花瓶民芸の名で売れる　岡山　翁童

陶工の命が花瓶に秘められる

一輪ざし子の真心のカーネーション　倉敷　春日

花瓶に入れた野草も見直され

賞に貰った花瓶棚にほっとかれ　大阪　ますえ

花活けた花瓶へ和む署の空気

花のない花瓶愚痴が聞えそう　東予　悠泉

箱書きに惚れて花瓶を買いかぶり

お師匠が活ければ花瓶までが生き　橘本　木魚

お隣りで花瓶に欲しい花が咲き

結納日花瓶めでたいものを活け　平田　代仕男

妥協する朝は花瓶の水も替え

四季の花咲かせて花瓶誇らない

吉日の花瓶は床にかしこまり　倉敷　梁水

好きな花一輪ざしで心足る

誰か来る時だけ花のある花瓶

造花でも挿せば花瓶が生きてくる　堺　緑水

長病へ花瓶の位置もかえており

失意の日静かに花瓶の水を替え

造花ばかりさされて花瓶泣いている　西宮　多久志

佳　句

線香の匂いばかりを嗅ぐ花瓶　今治　宵明

お隣りの好意いただいてる花瓶　寝屋川　小路

引出物又花瓶かという重さ　西宮　多久志

式場の花瓶は美辞を聞き飽きる　倉敷　白水

代用の花瓶で飯場も春を活け　鳥取　洋々

人ノ句

牛乳瓶に挿してもバラの妖気めき　一二三　藤井寺　吸江　四　美幸

地ノ句

日本の四季を花瓶は忘れかけ　六五　熊本　芳仙　七　多久志

天ノ句

咲き誇る花の命を花瓶知る　八九　八尾　美幸　一〇　弥生

選者吟

さまざまな卒業式見た大花瓶　一一　吸江　一二　つき子　翁童

昭和五十年度

ベストテン（五月現在）

可住	一三、〇	兵庫	一四	花梢	一〇、〇
一二三	一二、五	堺	一五	牧人	一〇、五
好一	一二、〇	大阪	一六	白梅子	一〇、五
			一七	梁水	一〇、五
			一八	美子	七、〇

一三	柳志	一一、〇	八尾	一九	維久子
一四	花梢	一〇、五	西宮	二〇	宵明
一五	牧人	一〇、五	八尾	二一	文秋
一六	白梅子	一〇、五	貝塚		
一七	梁水	一〇、〇	大阪		
一八	美子	九、五	岡山		
		九、五	寝屋川		
		九、〇	藤井寺		
		八、〇	鳥取		
		八、〇	大阪		
		八、〇	富田林		
		八、〇	神戸		
		七、五	笠岡		
		七、〇	倉敷		
		七、〇	東大阪		
		六、五	富田林		
		六、五	今治		
		六、五	大阪		

以下略

昭和五十年度第八回

「比べる」　五句以内

締切　七月二十五日

第九回

「なぞ」　五句以内

締切　八月二十五日

投句先

〒590　堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方

大萬川柳係

月例会において一万円宛積立、（昭和52年3月まで）

申込締切　昭和50年9月末日。5月以降申込の方は来年一月例会までに十万円になるように積立。

参加資格　本社関係の人の推薦で誰方でも参加できます。

参加申込者―若本多久志・西尾栞・菊沢小松園・橘高薫風・島居百酒・野村太茂津・若宮武雄・板尾岳人・藤岡花梢・岩田美代・和田維久子・天正千梢・垂井千寿子・内芝としよ・宮西弥生・太茂津夫人・小松園夫人・薫風夫人・金谷和子・伊藤ご夫妻、樫谷漫柳。

ふるってご参加ください。

夢のハワイ観光

日米交歓川柳大会

日　時　昭和51年1月21日（水）から、1月26日（月）―5泊6日。

場　所　ハワイ

旅行費　二十万円程度？（次号発表）

旅行社　近畿日本ツーリスト

主　催　ハワイウイロー社・川柳塔社・団長　若本多久志。会計　板尾岳人。会計監査　西尾栞。地域委員　西田柳宏子、野村太茂津

申込方法　第一回申込金三万円。あと毎

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼中島生々庵主幹は六月号（直原玉青画伯の近況）を百冊購入、画伯の門下生ほかへ贈呈された。ご多忙の中を例年の阪急百貨店内の画展にも出品、また高知川柳大会へ、ご夫妻で出席。

▼柳都（新津市・大野風柳主幹）六月号で第6回川上三太郎賞を発表。―償いの朝かも吹雪の中に佇つほか四句―庄子喜一氏。第1回白石朝太郎賞は―企んでからの微笑をくずさない―中川清氏。表彰式は第26回新潟県川柳大会でおこなわれる。

▼川柳研究四月号で49年度賞を発表。第一席「とある日の歯車に見た深い海―荻原鹿声」第二席「花束を抱くどこまでも重い海―古谷恭一」第三席「この肌の底のわたしは独りぼち―山崎空拳」なお五月号は三浦太郎丸追悼号。

▼川柳宮城野四月号で49年度最優秀作品発表。「ひとつずつ慈悲を繋いで数珠となり―藤井柳風」

▼川柳こなゆき五月号で49年度こなゆき賞を発表。冬眠子賞は「引き金に指がかかっている平和―夏海ぶんじ」ほか四句。新人賞「倖せはこのへんでよし白い飯―嘉瀬美枝子」ほか四句。

▼川柳はこだて六月号で第17回花童子賞発表。「嫁の手を通して息子からの金―大面力也」ほか四句

▼水郷夏の川柳大会は8月17日午前10時から大洲市三の丸、市民会館中ホールで開催。兼題・計算器・桁・蛙・他人・ドラマ・親・すっきり・二つ三つ―席題二題の予定。特別課題吟「と・み・す」の折句。（各三句）投句料三百円、締切8月13日、4㎝×18㎝の句箋―投句先〒795大洲市常盤町―米沢暁明宛。

▼第19回国連全国大会は9月6日・7日鳥取駅前・丸茂旅館で開催。宿題「つなぐ―森田茗入選」「鉄―河村日満選」本社同人ほか「力」「一人一役」「人脈」（二句）大会問合せは山陰本線鳥取駅運転、大坪天涯宛。

▼濤明忌川柳大会は8月10日午前10時から熊本市草葉町社会教育会館ホールで開催。宿題＝水・奥様・キャンプ・弱い・恩人・動物園の風景・紅白＝（3句）投句は二百円（発表誌共）締切7月31日〒862熊本市京塚本町五三―一二、七谷方川柳噴煙吟社大会係。

▼三浦太郎丸追悼句会は7月20日正午から中央区新富一ノ一六ノ八印刷会館で開催―投句拝辞とある。宿題は―三人・太い・丸い・弔句一句―連絡所東京都文京区千石三ノ三五ノ三白倉寿夫方川柳人協会事務局。

▼故高木夢二郎氏の遺句集発刊。送料共で八百円（九月中旬の予定）〒107東京都港区赤坂七―六―三、柳樽寺川柳人編集室へ。

▼西日本川柳大会が9月14日に開催されるが「東洋樹受賞記念」大会となる。橘高薫風氏が本社から兼題選者として出席する。

▼金子呑風氏（上田市）から―第29回県大会は盛会でした。三太郎先生が同地の柳人に招かれ国民服姿の写真を拝見、これは三十余年前のものでした。高峰柳児さんに会い川柳塔社の話をし大分元気でした。―永尾英断氏は長鉄川柳会へよく来られていたので交通禍の怖しさを思い知らされています。

▼ふじほう川柳交歓大会は本年から中止になった。

▼同人の動向▲

▼北川春巣氏（副主幹）七月中旬に札幌で「産業衛生学会」が開かれるが、出席のため体の調整をしておりますと。

▼西尾栞氏（副主幹）は週刊やお市民新聞川柳欄をこのほど担当。雑詠、時事吟などハガキに三句（但し八尾市在住の人）投句先は〒581八尾市八尾木八一七西尾栞宛。

▼若本多久志氏（西宮市）は5月26日に開かれた兵庫県商工会館での県文化祭県民川柳大会の実行委員会へ出席。10月19日の大会選者に多久志氏は篠山の小西無鬼氏を推薦された。なお初心者用に「自動車販売ニュース」〝時事川柳のたわごと〟を好評執筆中。

▼本田恵二朗氏（倉敷市）は、ますかっとの大森風来子氏らと6月11日羽田発で渡米、16日はサンノーゼ市で全米川柳大会の兼題選者として出席。

▼大坂形水氏（大阪市）は大阪府から産業功労章をうけられた。七月上旬一週間の予定でドック入りされる。

▼久家代仕男氏（平田市）49年産米政府買い入れの政令運用状況報告もやっとすみ、また川柳に力をそそぎたいと思っていますと。

▼河村日満氏（鳥取市）は時の川柳社の大会後、12日奈良からの帰りに心斎橋で降り本社の前まで行きましたが、素通りしてしまいま

食べすぎ・のみすぎに

新タケダ胃腸薬

効能＝食べすぎ、のみすぎ、胸やけ、二日酔い・悪酔いによるむかつき・はきけ・嘔吐に。

☆3層錠…27錠・60錠・150錠　☆顆粒…16包・40包

タケダ

したと—その日は一三夫・葉子が社におりましたのに残念でした。

▼岡崎祥月氏（松江市）は学校支部長に栄進。

▼河井庸佑氏（大阪市）は春の移動で教務主任として生野区東小路小学校へ。

▼川上大輪氏（三重県）五月五日に長女祐貴子ちゃん誕生。おめでとうございます。

▼三井酔夢さん（香川県）隠岐吟行から帰ると十坪程ですが増築が始まりました。当分は籠の鳥ですが七月七日には何とか出席したいと思っています。

▼原独仙氏と板垣草丘氏から—5月31日に襲った島根竜巻きに日御碕の尼緑之助句碑は無事でしたと。

▼阿万万的氏（泉大津市）は、絵入り句集「川柳散歩・大和路」を発行。—春夏秋夏奈良のこころの東大寺—大阪府泉佐野市中庄一〇八一—九九、阿万万的。

▼藤田軒太楼氏（大田市）五月四日に大田川柳会が発足、出雲の緑之助氏、独仙氏を迎え今後の発展が期待される。

▼小西無鬼氏（篠山市）から—永尾英断の交通事故について大阪の皆様にお世話になりました。ありがとうございました。

▼山田季贅氏（高槻市）は5月11日、篠山の故英断氏の告別式へ参列、白渓子、客遊子、求芽、紅月、秋月諸氏ほか多数、国鉄柳人が駈けつけられた。

▼月原宵明氏（今治市）から—第21回愛媛川柳大会は汐風社主催で一三五名の盛会でした。川柳塔関係では鶴声・静水・鬼焼・蘭幸・有里・暁明諸氏ほか多数出席。

▼長野文庫氏（今治市）から—来年は一五〇名が目標。当日の寄せ書はハガキせましと雅号がいっぱい。

▼横山一声氏（岡山県）から吉永川柳社吟行の寄せ書拝受。

▼高橋操子さん（岸和田市・参事）は最近すこし体調をくずされたが、幸代さんご夫婦らの看護で徐々に元気をとりもどしていると。

▼堀江芳子さん（島根県）退院後は食事療法につとめ、あれもダメこれもいけないの戦いでございますと。

▼板尾岳人氏（富田林市）宅を地図も持たずに石部世山氏が訪ねたずねて来られ、柳友の熱情に感激したと。

▼同人名簿P9上段、津田与志は津田与史と訂正

▼不二田一三夫氏が新関西新聞のサンデー読切小説ほか執筆している作品の舞台が短詩型文学になっているが、登場人物などすべてフィクションであることをおことわりしておくとのこと

▼藤村メ女さん（西宮市）の尊父岡田六三郎氏（92）が五月十七日津山の自宅で逝去—謹悼。

▼今西章雅氏（本名頼光）は5月28日肺閉塞で急死された。M40年生まれ、薬局を経営されていた。令息崇浩氏からのご通知でこの悲報を知ったのは6月2日だったため告別式にも参列できなかった。令息は遺句集を出したいと云っておられる。合掌。

▽旅信△

▼若本多久志氏から—長崎雲仙を中心に長途ドライブ「一こまの歴史へしばし冥想す」

▼越智一水氏から—息抜きに別府の湯につかって「碧層々ここでも一泊したいとこ」

▼山本素郎氏から—吟行の下見に宮島、萩市を回り「洞門の大小神の彩あかき」

▼菊沢小松園氏から—川柳わかやま吟行の加太へ来ています。好郎、雀踊子、太茂津、弘生、柳宏子、岳人武雄諸同人参加。

▼**7月の句会▲**

▼**南海川柳会**—17日6時から—題—制服・重荷・帳じり。会場は南海電鉄本社食堂内。

▼**南大阪川柳会**—20日6時から—題—過去・糧・もろい・宙。会場は松崎町三丁目大萬。

▼**川柳東大阪**—28日6時から—題—筋書き・水しぶき・あかん・クーラー。会場は東大阪市中央公民館2F第二集会室。

新同人紹介

林（はやし）　春栄（はるえ）
—操子・一三夫・推薦

白岩（しらいわ）　文衛（ふみえ）
—恵二朗・栞・推薦

うまさをそのままお届けします
アサヒビール

本社　六月句会

会場　以和貴荘
六日　午後六時

50年度の折り返し点である六月句会もおかげで盛会。

初出席の方をどなたかが毎月連れて来てくださることは心強い。

若本多久志氏の柳話は、氏が実践しておられる老化現象を防ぐための頭の体操、つまり疑問帖なるものをこしらえ、わからない古語や新語などにぶつかると、それを解明するまで追究するということである。

われわれが日常使っているコトバと、その語源が全然違っているものを、一つ一つ例を挙げて説明された。

電話は「ハロー」にはじまるように、わが国では「モシモシ」である。「若し若し」かと思ったら「申し申し」だったとか、愉快な話が時間いっぱい続いた。

月間賞杯は〝月間賞男〟城一舟氏にかがやいた。

外は雨だった。大阪は七月が梅雨期にはいるそうである。　―定刻八時半閉会

（進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）

出席―与呂志・多久志・正彰・古方・一三夫・滋雀・静歩・義弘・静馬・花梢・百酒・重人・美幸・文秋・形水・いわを・福水・肖二・綾女・柳宏子・敏・川狂子・南柳・柳信・儀一・誓二・素郎・好一・与史・喜風・緑水・葛城・維久子・夕花・鬼遊・鶴声・頂留子・酔升・牧人・千万子・つき子・吸江・凡九郎・一舟・鎮彦・博泉・亜成・十止庵・度・千梢・一二三・瓢太・酔々・雀踊子・岳人・薫風・恒明・智子・君子・小松園・恵美子・弥生・あいき・庸佑・葉子。

席題「相談」　森中恵美子選

相談に乗らぬ親類金を持ち　小松園
相談がまとまり老いの目がうるむ　与呂志
相談は二の次にして飲む話　牧人
相談に来いと税務署言うけれど　多久志
倖せは相談できる父がいる　十止庵
ライバルへ嫁く相談を聞かされる　鬼遊
人生相談やはり他人という答え　十止庵
ワンクッションおいて女から相談　つき子
相談に狐と狸ばかし合い　福水
再婚へ相談せねばならぬ人　鬼遊
けもの達の相談お月様見て御座る　一三夫
相談相手いつしか恋の人になり　夕花
相談もせずに夫婦の仲直り　岳人
縁談が姉と相談して決まり　文秋
相談に距離をうずめていく親子　花梢
相談に何故来なんだと死んでから　鬼遊
蒸発を月に相談して止める　美幸
相談の最後は神に聞いてみる　維久子
相談に男男を捨ててくる　花梢
相談が進む喪服の嫁のこと　酔々
もう一人の僕に相談する鏡　美幸
相談にゆく日の指輪抜いておく　智子
相談をしてほしかった遺書を読む　一三夫
相談もなく爆弾を作ってる　酔々
駅前で相談している造花です　岳人
相談の胸が重たい靴である　重人
相談役の名にして牙が抜いてある　牧人
レモンに負けて相談に乗っていた　つき子
金の相談らしいひょっとし面を用意する　君子
相談は拳の中で冷えている　静歩
年下の男の甘い相談で　恵美子

席題「割り勘」　古川　鶴声選

割り勘を知らずぺこぺこ飲んでいた　静馬
割り勘に賛成をして欠席す　素郎
貸借が嫌い割り勘主義と言う　文秋
割り勘で済ませ二人に恋がない　文秋
割り勘の味が別れる味にする　維久子
予算ぎりぎり結局割勘まわって来る　弥生
変な顔して割り勘やったんか　古方
ここからは割り勘ですと区切りつけ　好一
割り勘へ払った金が腑に落ちず　葛城
割り勘と決めて立替え忘れられ　一舟
割り勘へ女小ゼニ持っている　雀踊子
酔ってないのが割り勘をすぐに割り　恵美子
割り前の追加を幹事すまながり　静馬
割り勘にしたタクシーへ五人乗り　福水
割り勘の計算をする箸袋　鬼遊
割り勘をその場で出し合う女子学生　形水
割り勘にするには地位が邪魔をする　智子

割り勘の間は友情よりは出ず　綾女
割り勘の酒で左遷送られる　多久志
ラブホテルの費用迄割勘で取る気なり　瓢太
手の平へ割り勘乗せてわらび餅　鎮彦
割り勘が平行線をたどらせる　柳信
割り勘で飲む友情がまだ続き　与史
割り勘へ一円玉が生きている　雀踊子
政協会割り勘にする政資金　鶴声

兼題「育てる」　竹中　肖二選

君に忠親に孝行もなく育ち　日満
育てるに手間の掛らぬ児を貰い　曲ん手
悪の芽を育てるネオンの宝石　どんたく
時宜を得た間引良材よく育ち　軒太楼
一杯のコーヒで恋を育てる気　一栄
子育てに追れて艶のない女　思月
歌手にでもならんかいなと子を育て　日満
育ててるうちに天地の恩も知り　弘生
何もかも育児書通りにしてるママ　庸佑
子育てに夫婦の意見食い違い　儀一
こんな子に育てた責めをなすり合い　滋雀
犬猫の方が上手に子を育て　柳宏子
九官鳥育ての親の出雲弁　小松園
野育ちの儘で素直な実を結ぶ　いわを
はえば立て立てば過保護になっていた　古方
育ててはは見たが蛙の子は蛙　葛城
母哀し生んで育ててひそといる　静歩
スパルタで育てる意志がもう崩れ　文秋
この真珠育てた貝は放っとかれ　緑水
赤軍になれと秀才育てしや　千梢
人知れず日記の中に育つ恋　夕花
貧乏の中に育った土根性　柳宏子
草花を育て平和な心持つ　文秋
真剣に育てた子から叛むかれる　綾女
灰色の街にも育つバラ色の夢　滋雀
かぶと虫育て団地に土がない　十止庵
残飯で育てる豚の太りよう　緑水
育てられ育てて歩む人生譜　好一
温室で育った花にない個性　好一
育て甲斐あったと嬉しい泪ふく　酔升
歪んでる松に育てた人の欲　小松園
栄光の勝者に育ての鬼がいた　牧人
陽と土のめぐみトマトの芽が青い　維久子
八人も育てた顔でない丸み　智子
逆境に生きて胸打つ詩が育ち　正彰
大国の核を育てるエゴイズム　肖二

兼題「旗」　山本　素郎選

白旗を振る踏切も姿消す　季賛
旗出したあと手品師鳩を出し　登美也
優勝旗覇権を嫌う国が獲る　弘生
雑踏へガイドの旗に追いすがり　としよ
ひとみんなそれぞれの旗を振っている　亜成
振る旗さえ持たない底の底で生き　どんたく
日の丸に聞けば平和な風が好き　曲ん手
旗もってよそのストまであふりに来　日満
旗揚げをするとは便りだけだった　いわを
保母の振る旗が過保護に逆らわれ　儀一
大衆の旗に昨日の色がない　十止庵
産声にもう降ろされぬ父の旗　美幸
仕事よりお金がほしい赤い旗　鬼遊
旗立てみたがボーナス軽るかった　吸江
マンション族いよいよ国旗に用がない　静馬
女だから世界湧かせた日章旗　柳信
落し穴旗の下とは知らなんだ　千梢
ジャルパック農地を売った旗で混み　一二三
ベトナムの孤児に祖国の旗がない　酔々
歓迎の旗へ素直な笑顔出る　柳宏子
寄せ書きの旗が出てきた大掃除　蘭
勝ち負けはどっちでもいい旗を振り　緑水
地球儀のここは揺れてる国の旗　花梢
父の唄う軍歌に白い旗がない　雀踊子
赤潮の海に大漁旗を流す　酔々
旗色がきまりサングラスを外す　十止庵
日の丸が大好きだった男の死　酔々
旗振っているのに誰も見てくれず　素郎

兼題「骨組」　小浜　牧人選

骨組が上った木遣り酒とする　どんたく
骨組の割りに気骨のない男　一栄
文明は骨組細い子が育ち　藤持
がっちりとした骨組は女子の方　亜鈍
骨組は出来たが金策ついて来ず　静歩
骨組のそれから予算けずられる　頂留子
骨組がガッシリ甘党とは見えず　一三夫
骨組のうちから保険屋つきまとい　好一
着飾った和服の肩はいかり過ぎ　葛城
骨組へ日照権がもう騒ぎ　文秋
反論の眉骨組を建て直し　滋雀
骨組の勿体なくも仏さま　小松園
骨組へ夫婦の夢はいま結ぶ　恵美子
屋台骨組む村々の夏まつり　川狂子
骨組のこんなとこまで父に似る　緑水

雅号ぶっちゃけばなし（142）

ぎょうどう

わたなべ

渡辺暁童

三才にして母を失い、小学校は今の言葉で長欠児童、立川文庫は読まない方がすくなく、ややこしい読み方の歌舞伎の芸題は小学校六年で大体皆伝、青年初期映画の全盛期、日活の文芸作品、大時代特作以上に洋画に心酔、アスフワルト、帰郷、望郷、父と子、モロッコ等々。大都市ではすでにトーキーで公開、今治あたりでは解説付き。

洋画専門の解説者松井暁堂氏に重ねて心酔、暁堂を暁童に無断借用して四十数年。

還暦すぎて童でもあるまい、今更改号なんてと人は言う、古稀以後暁老はいかが？

（六十四歳）

筋骨隆々女のような声を出し　吸江
働かぬ骨組地下でごろ寝する　弥生
肥満児の骨組脆いとは見えず　君子
骨組を言わず体裁ばかり言う　智子
裸一貫骨組たしかな人でよし　夕花
骨組に流石成金匂わせる　喜風
骨組が違っていたと買いかぶり　千万子
骨組の丈夫がとりえ嫁として　川狂子
骨組を按摩が褒めて揉みほぐし　福水
骨組に田舎育ちを見抜かれる　喜風
骨組みを隠すモルタル厚く塗る　葛城
骨組を遣すドームに猫生きる　美幸
骨組みのどの一本にもあるいのち　形水
骨組を誇って古稀のランニング　与史
たくましい骨組貧困はね返し　つき子

骨組みの細さのれんはまだ継げぬ　十止庵
建売と言う骨組の細いこと　柳宏子
マイホーム案外強い女骨　弘生
骨組が出来て夫婦は走らない　岳人
骨組みがちがう力で手を握り　日満
骨組を見て言い返すのを止める　美幸
骨組は母に似ている母思い　恵美子
たくましい骨組父母の遺産です　一三夫
骨組の通り歪んだプラモデル　肖二
骨組に鉄の強さをもつ男　緑水
鉄骨を組んだ高さに明日がある　牧人

兼題「苔」　橘高薫風選

燈籠の苔が野立をたのしませ　登美也
大事がる苔を孫めが来ていじり　一栄
語り継ぐ悲恋に苔むす比翼塚　軒太楼
苔寺の苔いろいろの苔があり　瓢太
密通の事実苔がついていた　弥生
美しい仙女に逢えそう苔道ふむ　君子
苔寺の苔に憎しみ捨てて来る　肖二
苔蒸してもの言いたげな石仏　酔升
高野山敵同士に同じ苔　一舟
傷心を苔に溶かして京の寺　一二三
鎮魂の碑が苔むしている平和　思月
ゼニを取るそれから寺の苔が死に　重人
ビロードの苔を褥に落椿　静馬
苔寺でひと息入れる花疲れ　静馬
役柄をわきまえている苔の色　恒明
盆景の急所で呼吸してる苔　踏草
働かぬ手が庭石の苔を撫で　肖二
苔の径すでに家督は子に譲り　智子
苔生えた庭を車庫にしてしまい　葛城
苔の道やさしい言葉撰っている　智子
心眼を閉じれば苔も森に見え　太茂津
美作の恩師の句碑に苔を見し　多久志
苔静か仏の私語が聞えそう　千万子
苔蒸して無縁仏は眠るのみ　曲ん手
よく笑う女と苔を踏まぬよう　恵美子
枯れるもの枯れて苔寺冬の貌　花梢
南無大慈悲を秘め苔むしぬ　与呂志
七彩の噴水苔のつかぬ石　千万子
苔青く梵の一字があれば足る　酔々
目の前の苔乾いてる逢いたくなる　薫風

（河井庸佑・整理）

名地物壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳たましま　稲田　豊作報

信念の靴が悪口踏んで行き　慶子
幾山河律義な父は汗で塗り　梁水
自画像を復元すれば影がない　三辛堂
にらまれる位置に主軸として坐り　扇水
口下手の濡れ衣お日さま干している　豊作
砂指をこぼれる女の稼ぎです　成行
洪笑の軸に私の影がある　八笑人
塗り替えて古塔に重みのない姿　朝二
怒ること一つ控えて今日を生き　皷草
ポケットの眼鏡をやっと探し当て　流風
口下手が脚本通りよく喋り　筒子
外側を真赤に塗っても燃えて来ぬ　誠一
口下手がまとめて戻ったよい話　安静
怒ってはみたが情に親が負け　静海
おてんばが振袖似合う齢になり　笑門
新幹線鉄道唱歌を切って捨て　よしを
共稼ぎ時代が笑うアルバムよ　克枝
倖せはずけずけ思ったことが言え　麗水

川柳たけはら　菁居報

五十と九まだまだあほうになりきれず　静水
二人きりになったお膳でひそとたべ　房子
ライバルがいてスランプと言うとれず　蘭幸
川は流れて女の命とどめず　笑子
春浴びるちんぽこもうすぐ満一才　文晴
先生と呼ばれて勇気が少し出る　千代美
個性伸ばしてやりたいだけの学資です　貞子
かきわける雪大根の葉が青い　政己
癒遅々と時計狂いもなく刻む　不朽
年寄りの味覚へ煮物喜ばれ　そのみ
神明さんたおれるまえにげようか　愛
さわやかな酔い一日をしめくくる　菁居
停年後まだ働ける夫お在す　かつ子
凡人を千古に誘う千木高し　峰泉
ホッと月見上げる春の夜の素足　紫光
土わけた芽にこぼれ陽が温かい　一路
週休二日子に三食は欠かせない　英詩
ペン燃えるこのつまずきも糧にして　酉合
賛成をしない頼れる友である　扇水
共稼ぎ互に合鍵もつ強み　スミ子
四・五匹はいそう住みつく猫の腹　凡女

菜の花句会　鬼遊報

割れ物は最後に持ってゆく転居　肖二
モウレツとハッスルが嫌い爪を剪る　鹿蔵
嫌われてアワダチ草は腰を据え　福水
運命線弱い蛙が事故にあい　紀美代
小銭持つ男が今日もよう笑い　幸生
踊り子の過去はライトの陰に消え　肖子
宇宙から見れば地球は青い檻　美幸
男と女片道切符で燃えました　弥生
預りもの持って酔えない縄のれん　柳宏子
苔寺の青さに染まる足袋の白　美代
踊り子に明日も天城の空がある　十止庵
トルコ石の深い青さにひそむ謎　綾女
重いわと漬物石を甘えられ　誓二
喪のあけた女に海が青くなる　夕花
死に金を使う男でおだてられ　雀踊子
実印を持つと男は歩かない　岳人
母の忌の母の嫌いな雨になる　酔々
一泊も妻の許しの要る男　喜風
離婚しておいて嫌いとは言わず　弘生
もて過ぎる男で世帯まだ持てず　儀一

高知川柳社（高知市）　川竹　松風報

喜びの隣り昼から酔の匂い　紀人
出産の名に喜びの輪を拡げ　天花
伝統を燃やす若手の太刀踊り　佳月
照明に踊り娘はみな笑顔なり　芽十
人間の歴史求めてる虫眼鏡　寛耕
虫眼鏡易者はなぞを捜し当て　晩豊
女房のパンツが乾く家の裏　栄信
女房の疲れ子供をよく叱り　次紅
女房のヒスあけにくい戸を叱り　雨窓
会議中沈思黙考眠ってる　花長
沈黙の子へ愛情を省りみる　子蟠
沈黙のなやみは鏡だけが知り　蛇みつ
波風を嫌って老いの黙り癖　子松
勝算があり沈黙をまだつづけ　風美
招かれて母靖国へ泣きにゆき　和裕
沈黙の長さに耐えている手術　二恭
聴診器生命のせせらぎを聴くか　一新
有夫の女とは時に憎きもの　之助
動けば金がいるので寝るとする　竜子

川柳わかやま　太茂津報

川柳塔社同人句集

「川柳塔」

頒価　一五〇〇円
送料　一六〇円

傷つけず生きる悟りの柳とも　武雄
団地馴れ柳に風と聞き流す　千寿子
柳の下どじょうが居ない日の焦り　維久子
十三夜そんな情緒もない柳　凡九郎
ライバルもおなじ深さの溝を掘る　十止庵
深い仲線香花火が知っていた　岳人
抜き差しのならぬ深みへ来て悟り　万作
闇のある深さへ吸い込れそうになる　雀踊子
深い仲と男の方は思ってず　弘生
寸分の隙ないおしゃれ着て無職　柳宏子
深なさけ女は世間恐れてず　小松園
停年へ長いローンがつきまとい　福水
背なの子を叱り陽ざしの立ちばなし　きみ
子の形見お地蔵さんに着てもらい　としよ
一張羅着て銀行へ借りに行く　冨江
手術室でほめられて来た気の長さ　英子
ふだん着の会へ着てゆく物がなし　十郎
日曜の和服に自我を取り戻す　白光子
傷深く残し他人の顔でいる　佐知子
長い尿笑えぬ年が来てしまい　与史

岸和田川柳会　植山　武助報

六十を越えて五十の若さを知る　葛城
喜寿祝う孫と踊ったフラダンス　裕子
若いなどと言われてみても歳は歳　静芳
母さんの十八番は何時も赤トンボ　春栄
あやつりの糸がもつれて幕になり　加仙
急降下トンボシッポを冷やしつつ　有雅
よろこびを心に秘めて里帰り　千代
よろこびをバッグに詰めて発つ羽田　勝晴
嫁ぐ娘へもう一人娘欲しくなり　武助
通過した貨車の桧の香が残る　香珠夫
新薬の裏で売れてる家伝薬　白光子
種蒔いて大地の温み疑わず　露子
一言を慎しみ合って同居する　幸代
家に帰るといつか無口になる同居　操子

駒つなぎ川柳会（大阪市）岸　南柳報

一夜妻こんなところにあるほくろ　はやを
このほくろ父にもあった浮気性　鎮彦
首筋のほくろなまめく春の宵　綾女
本人の知らぬほくろが背なにあり　儀一
年代と共に成長いぼほくろ　茂子
色情ほくろ持って子宝恵まれず　正彰
叱られた通り人形を叱ってる　規一郎
もう一度叱ってほしい父が逝き　信義
大衆のまえで叱るも汗をかき　南柳
叱られただけ娘炎えて来る　美代
叱られて気晴らしに行く散髪屋　柳信
叱りすぎになったか子供寄りつかず　宏子
兄ばかり叱られているケンカ　石捨
叱ってから慕われているなさぬ仲　潔
叱られて涙の捨て場滑り台　悟郎
叱られて吊橋ゆすっている野猿　岳人
叩かれたら叩き返せと叱られた　眉水
叱られているが花だと専務云い　多津緒
叱られた恩師へ妻を見せに行く　恭太
有り難い叱ってくれる友が居る　小路
神様に叱られそうな嘘一つ　肖二
叱られた腹いせ横の子を叱り　摩天郎
始末書ですませてもらいほっとする　恒明
叱るだけ叱って味ない箸をとり　小松園

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

地下鉄の恋は地上で冷えている　酔々
労働歌　地下鉄までは聞こえない　いわを
働いて食うてる腕だ細くとも　小松園
働いてきっと返します涙　恵美子
当選祝一票入れた顔で飲み　好郎
当選をしてから腰が低うなり　万里
あこがれた女教師平和な家庭持つ　鎮彦
憧れているとは知らず変なひと　儀一
地下鉄でもやっぱり子供は窓へ向き　瓢太

北川春巣著
随筆と句集「聴診器」
送料共千円

地下鉄に勤め土竜のような日々　幽玄
首のない男同志の労働歌　美幸
働きを褒めて賃上げしてくれず　喜風
働いているとは見えず蟻の列　痴亭
憧れの都会で遊ぶ灯に染まり　修史
働いていない男に金を借り　鬼遊
目立たなく働く妻の座は強し　重夫
心臓のきげんとりとり地下鉄へ　サヨ
地下鉄へ都大路を掘り起し　史好

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

肩書の数が物言うPTA　みどり
肩書より実収の良い課へうつり　駒村
肩書のない名刺だけが残っている　酒井
駅長さんもお尻押してるラッシュ時　健坊
駅長の帽子の下の顔になる　亜成
初出張何か肩書つけてやれ　前田
肩書を見て受付は留守と言い　常夢
肩書の無いのが会社の危機救う　一扇
肩書も無くなり夫婦で旅に出る　千夢
ひけらかす程の肩書でもあるまいに　栄
肩書がとれて微笑たやさない　聖地
肩書に元までつけてしがみつき　木石
肩書はなくても明日を背負う人　博泉
駅長の手袋白いお出迎い　形水

北風を追う敗北の重い足　弥生
肩書の名刺と顔を見くらべる　入仙
重役の名刺バーでも撒きたがり　好郎

ハワイ川柳ウイロー社　林　蒼蛇楼報

血圧も気にしておれぬ忙しさ　公女
血圧を計りお医者は首を振り　秀山
血圧に妻が気を揉む夜の酒　拝山
血圧は血圧なりにそっとおき　峯円
好きな酒やめさせられる高血圧　紅渓
かみなりが止んだ専務の高血圧　蒼蛇楼
たわむれがすぎて血圧乱れ出し　暁舟
振り上げてこぶし血圧又あがり　万里歩
悪友も血圧二百は誘われず　彩珉
血圧が気になる様な齢となり　小雪
血圧に油断禁物命取り　稠雄
帳尻が合わず血圧高くなり　一つ葉
持株が下落血圧上昇し　快夢起
血圧を気にしながらも猪口を受け　河舟
おごられる酒へは血圧気にしない　風影
貧乏へ血圧だけがついて来る　三石
満ち足りて血圧昇る五十過ぎ　雪女
血圧を計り安堵の古稀夫婦　北海

南大阪川柳会　金井　文秋報

逢うてきた余情を映すコンパクト　好郎
目に映るだけを信じてせまく生き　十止庵
不機嫌に立てば水面の顔ゆがみ　正彰
ゆがんで映る他人の目を逃げる　雀踊子
梅咲いて下着干す場所換えされ　小松園
M寸の下着が無理になり初め　恒明
息切れに耐えて流転にある気骨　滋雀
世をすねて流転の切符買う女　鎮彦
生々流転運命を背負うてゆく男　君子
リーダーは美人参加者殖えてくる　克美
好物を出せば飯櫃底をつき　鶴声
好物を医者まっ先に止めさせる　凡九郎

耐えぬいた土台に光るこけの色　好一
土台から出直しますと家裁から　儀一
手ざわりの荒き礎石でよし土台　古方
どっしりと土台に座る妻の顔　万里
城跡の石に流転の詩を聞く　弘生
借金が土台になったマイホーム　宗賛
ご先祖の土台へ不肖の子がすがり　柳信
頑丈な土台へ乗せる資金繰り　十郎報

川柳しんぐう　大矢

床の間も無いアパートの新世帯　寅蔵
聞くだけの桜我身をいとおしむ　喜一
酔うほどにもう桜など眼にとめず　覚朗
夜桜にパトカーの来し人だかり　よしほ
老桜もきれいな花を咲かしてる　栄
先輩の葉だ見知りおけ桜餅　豊水
候補者は花見の客も票に読み　華水
色々の恋も育てて散る桜　渓水
桜咲く日本に生まれ男です　了荒
行列を見て買いだめの気が起こり　良一郎
買いだめのニヤニヤしてる懐ろ手　武雄
買いだめへ金を持たない気の軽さ　与史
買いだめが流行遅れの物とする　句楽
買いだめの母に戦争まだ続き　富子
買いだめをして女の勝利感　美代
買いだめへ精一杯の市場籠　大輪
立い喰いのそばの美味さへ乗り遅れ　柳志
乗り遅れ急に手荷物重くなり　雀踊子
知らぬ地の情に触れた乗り遅れ　弘生
定刻に出た日のバスに乗り遅れ　十郎

川柳東大阪　竹中　肖二報

ひとり旅車窓と会話しつづける　古方
留守の窓覗く男と瞳が出合い　儀一
汽車の窓見送る母が泣き虫で　雀踊子
パイプラインどうつないでも西東　鎮彦
汗かいて話しをつなぐ語を探す　柳宏子

春の草紐の長さを牛が食い　小松園
紅白の紐が目出度いものにする　一栄
慈母の顔うかべゆっくり紐をとく　度
ボロ靴の紐も疲れを見せている　季賛
一本の紐も急所という着付け　凡九郎
貫録の腹でゴム紐きつすぎる　肖二
寒波来て梅見の酒が廻らない　文秋
観梅としゃれて不粋な風邪をひき　誓二
今年こそ湖底とならん梅の里　恒明
盆栽の梅から明ける父の朝　正彰
闇へ向く男の顔を変えさせる　三十四
どん底の心の闇に敷くレール　柳信
暗闇の魔力に男乗せられる　綾女
せめてもの抵抗闇でマッチ擦る　十止庵
小心な夫婦で嘘のないドラマ　思月

川柳ささやま　河原みのる報

逆転のパイを握っている無口　ひか平
無口から云ってはならぬ事が洩れ　とおる

佳句地10選（前月号から）

小砂白汀選

けもの道神話は草の蔭にある　十止庵
うしろから強く抱かれて見たい宵　小松園
中央に座って波紋の外にいる　修史
リアス式雲が冬の陽出し隠し　求芽
蟹の洗いは弾けて純白な冬の花　水客
金網の要る窓口に花を活け　扇水
逆らわぬ人で深さがわからない　静水
同病昇天こころに霜の降るごとし　不朽
どん底に落ちる足音消してある　雀踊子
飛行雲みたいに単車のロングヘア　秋月

どたん場で無口名言はいて去に　越山
ぼそりっと無口の一ト言止め刺し　みのる
職人の無口へ全部委しとき　八陣
判らいで無口深慮と誤解され　ヤン坊
久方に出世の友に口とじる　つや子
雑音に迷た口惜しい馬券舞う　可住
雑音もあるが人気もある男　素水
さりげなく雑音さぐる聴診器　淡水
チャンピオン今日着流しで渋い咽喉　百合子
タイトルを嫁に渡して孫の守り　孝
あの頃は米麦多収のチャンピオン　近江
アイシャドウブルースの王座守り抜く　宗珠
花模様浮かすだらりで京を売る　英断
うちかけの肩へ流れる花模様　とんぼ
暴力はと一つ撲ってから気付き　無鬼

いずも川柳会　板垣草丘報

小心の無慾人並の域を出ず　軒太楼
人並になれぬ頑固な意地を張り　湖楽
人並にようやくなった三年目　壮
庖丁の詰めに魚も色失せて　義実
驚いた親へ庖丁持ち歩き　由喜江
三十年妻の庖丁に飼育され　春梢
名人芸庖丁捌きに出る祝儀　河南
蕗取りに出た庖丁の立話　草丘
たった一夜のあやまちを追うて老い　朱紅
五体だけ人並以上手に負えず　虎秋
庖丁の音一日の幕を明け　雪美
人並にようやくなった三年目　壮
人並に夢見る歌手の卵達　鐘堂
イメージを抱いて孤独な旅の宿　祥月
人並に嫁ぎそこにもある苦労　代仕男
庖丁目逆手に持てばギャングめき　独仙
イメージをぬくめて空の人となる　緑之助

京都塔の会　松川杜的報

戦友は居るぞ軍歌のある限り　誠史
木洩れ陽をようやく受けて苔の冬　求芽
春水にそって野点の幕張られ　笛珠
百度踏む夫婦で鳩を追う如く　蘇堂
退職の乾杯健康だけ祈り　白渓子
祈りなど持たぬ男の正義感　王石
ポマードの匂うのがいる入社式　客遊子
衿足の匂いまともに満員車　明代
赤ちゃんの匂いも幸せに育ち　飛鳥
春の匂いもう逃げていく疏水べり　和友
距離置いて祈りに近い眼と思う　水客
ライバルと互に祈る合格だ　季賛
倖せとも思う祈る事のなし　杜的

川柳大阪　児島与呂志報

桜吹雪淀の川面へ通り抜け　秀峰
ダルマの目入れたら仮面ずり落ちる　重人
鈍行の旅途中下車また楽し　楽々
八卦見は自分自身が迷ってる　漁人
気軽うに乗ってブローカー離れない　笑風
開店の花輪へ匂う次期選挙　六竜子
ブローカー二つの顔を使い分け　道子
いい手紙中から切符こぼれ落ち　凡々
途中下車上手に組んだ春の旅　呑歩利
うちかけに愛しく育てた髪似合い　徳松
春遅い山の分校も花吹雪　誓二
旅づかれいやす暇なく義理が待ち　雅巣
用がないから犬も急がない　胡蝶
妻を信じて今日も病みつづけ　季賛
吉野山開く桜に散る桜　本蔭棒
ポスターはもう先生のような顔　敏
共稼ぎ和解せぬまま朝を出る　洛酔
途中下車尾行があるとは気がつかず　喜酔
女の業だからと女泣いとれず　与呂志

後楽（岡山県）　井上柳五郎報

もろ肌の艶は幸福さらけ出し　照路
老の艶ほめて余生を力ませる　たけ志

初心者歓迎

短期速成
費用低廉
内容充実

入会随時

（規則書呈上）

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
誓得寺内　関西奇術教室
電話大阪〇六(四)七一二八

板の間の艶に家風がうけつがれ　柳五郎
後添えがまだ要るらしい顔の艶　胡風
老らくの恋に燃えてる顔の艶　哲郎
マンションへ小さく住んで覗き窓　戡嘉
マンションは買えず積木をつんでいる　勝
マンションで女一人のパンが焼け　久米雄
オイルダラー動いて地球が風邪をひき　熙
老いの背に孫の手足がよく動き　廉
反抗期テコでも動かぬ面構え　秋月
明治から名医の家風で腕の良さ　博友
明治から大正・昭和と渡り初め　勝

和歌山七面句会　中筋三幸報

客の名を帰った後で思い出し　みゆき
客の嘘女将真顔で聞いている　凡峰
雪国に残る明治の子守歌　其夕
恋すすむ二人へ茶房もの足らず　冨子
来客の貧乏ゆすりに日脚伸び　光治子
愛絶頂二人に波の音もない　太茂津
ふたありで叱られに来たガラス窓　佐知子
二人して築いた家に一人住み　知也
客足もたえて夫婦にかえる店　政夫

見合して趣味も素敵と見た二人　利明
恋の歌三年前の傷にふれ　ふく代
二人目も女で三人目は生めず　勇次
手拍子に歌はみんなのものとなる　凡夫
歌となる嬉しき事をあたためて　和美
二人共頭打つまで放っとこう　三幸

城北明朗句会　川口　弘生報

幼稚園泣かしておいて告げに来る　静歩
よくもまあ裸足で帰るまでも飲み　右近
初恋の家を横目で通り過ぎ　百酒
他所の花素直に褒める楽しい日　弘生
年老えど父に余韻のあるにらみ　小路
欲のない生涯終えて惜しまれる　誓二
夜ふかしを叱りもならぬ春やすみ　柳信
食欲と別に痩せたい欲を持ち　ますえ
温泉の宿一人寝の夜の永さ　生仏
世直しを喜ぶひまに又値上げ　繁子
倖せが涙で笑う裏ばなし　満津子
今日も無事朝起出来るうれしさよ　つね
よろしくと名刺に無理が書いてある　十止庵
雷が落ちて騒ぎが寝しずまり　炉斉
桜花見上げ見おろす大阪城　秀村
すべらした一言女将抓られる　三十四
唐突に席を譲った高校生　春巣

南海電鉄川柳会（大阪市）辻　圭水報

春闘のマークを胸にあいそよし　圭水
春闘へ花の誘いが落付かず　宏子
春闘を知らず静かな駅の鳩　正彰
職安へ去年春闘の旗手の顔　凡九郎
春闘よそに町工場は音を立て　誓二
春闘の踏切猫が欠伸する　美幸
春闘も予定に入れてツーリスト　柳信
春闘のベッドタウンが恨めしく　儀一
春闘の折合い付いたベルが鳴る　鎮彦
春闘に出かける朝のきびしい目　清女
春闘に遠く地下足袋泥まみれ　十止庵
不況不況しかし春闘はでな記事　季賛

虹川柳倶楽部（唐津市）新岡回天子報

鯉のぼり見上げて彼は征きしまま　照沖
鯉のぼり紙でも嬉し園児の輪　ひろ坊
日当があるらしメーデー参加する　五木
娘の子のぼり立てて駄々をこね　実
物価高メーデー気分かえた声　三日造
公害に五月のぼりの武者にらみ　崟四郎
メーデーのいで立ち殿り込みのよう　一竿
五月のぼり立てたに息子女のよう　竜夫
メーデーに振り向きもせぬレジャー族　春吉
鯉のぼり海のにおいが吹きぬける　久隆
メーデーに盲道犬も居てうれし　勝一
メーデーに閑僚顔を横に向け　虹灯
ぐずついた天気に矢車だけ廻り　三男
メーデーに男優りの意気盛ん　回天子

三井が丘川柳会　高田　博泉報

指人形あやつるママの顔に汗　初枝
催促をして誕生祝してもらい　亜也子
誕生日を忘れながら老いてゆく　草生
黒白のリミット緑色が無い　一扇
恋文も切手貼るとき舌を出し　二松
声高し新議員誕生夜がふける　三郎
南方の緑がいやす激戦地　上田
爺ちゃんは嫌だがうれし孫誕生　雅
戦争の落し子として世に生まれ　章
革新誕生赤字の町を救ってや　形水
孫誕生これから先が大変だ　博泉
演出の筆から緑の出た墨絵　亜鈍
山門の仁王みどりの風を受け　世山
切手忘れた母の便りを読み返し　静歩
誕生に潮の満ちくる音を聞く　〆女
金に嫁せしか人形を抱く如し　新之助
むらくも川柳会　小砂　薫風
斗病三年注射のあとに春めぐる　昌
特価レモンパックに試される　さちえ
父祖の土地農夫は夢を捨て切れず　とみ子
変る世に明治のままの椿咲く　英子
不景気をキュッと飲みほすコップ酒　正朗
押し花に女心をひめておく　雪美
枯れ草の中に素直に咲くすみれ　美栄
日本の地図に自分の土地が出来　弘朗
あきらめを乗せて沈んだレモンティ　文子
孫の友レモンの香りする少女　マサ子
奇蹟待つ注射見つめる枕元　明朗
子の注射親の祈りを共に入れ　和幸
女ごころをそそる特技を持つ男　祥月
残り火が女心をもて遊ぶ　孝華
体育館の板一枚は僕の寄附　独仙
巧妙に女ごころをゆさぶらせ　秀子
路地奥でこの土地の者ひそと住む　草丘
歯の痛む夜を沈丁花が匂う　水客
レモンがにがい進展のない恋で　緑之助
嫁ぐ娘へ景気のことは口にせず　白汀

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (06) 三四五二一四
夜間 (06) 四四〇八

路郎忌句会

日時　七月七日（月）午後五時三十分
会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

挨拶　中島生々庵
講演　東野大八氏

兼題
「情熱」　若本多久志選
「立てひざ」　川村好郎選
「寝転ぶ」　菊沢小松園選
「雲」　西尾栞選
「似る」　中島生々庵選

席題　今月に限り休題
会費　三百円　各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

8月の兼題　「車窓」「原稿」　「秀才」「黒」

7月句会に限り5時30分開会

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば　東京・日本橋　京都・四条
高島屋

募集

九月号発表（7月15日締切）

・川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「避難」和田維久子選
「捨て猫」川口弘生選
「年寄り」藤井明朗選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「里親」藤田軒太楼選
「新刊」辻白渓子選
「利息」木山遠二選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳美をご使用ください。

規定はお守りください

定価三百円（送料十六円）
半年分　千八百五十円（送料共）
一年分　三千六百円（送料共）
昭和五十年六月二十五日印刷
昭和五十年七月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　藤原童心社
郵便番号　542
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一—三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

Toray
EASY CARE／手のかからないせんい
東レテトロン®
レインコート
東レ株式会社

・ペンペン草・

路郎忌

★路郎忌も今年で11回目を迎える。ことしはご多忙の東野大八氏にご無理をねがって講演していただくことになった。もう二十年になろうか、不朽洞で氏に始めてお会いしたのは……。その日、路郎先生から編集用の原稿をお預りして帰えろうとするぼくへ「もうすぐ東野大八クンが来るから、ちょっと会っていったらどうかね。侠気のある男でねえ、気持がうつる鏡があれば、キミとそっくりの男なんだヨ」とのことだった。新聞人であることは、毎号原稿をいただいているので存じあげていたが、ぼくとそっくりの気性とあれば、失礼ながら教科書に載るようなお人ではないことと承知した。氏の著書「人間横丁」のP183へ数行書いてもらっているが、上戸と下戸の両極端で、あちらさんはアルコール、こちらはコカコーラというテーブルの差し向いで、会えばいつも何かへ、怒鳴りつけている間柄である。

川柳の母

★ぼくのような人間に、いつも理解と愛情を示してくださる葭乃先生である。同人誌ともなれば十人十色、まず五人から色をほめられたら及第点だが、かつて路郎先生に「編集担当者は幇間みたいですな」と申しあげたら「もっと自信を持てよ」とおっしゃった。葭乃先生は酢いも甘いもよくご存じでときどき編集用にと、タバコを送ってくださる。しまいにバチが当たると思っている次第。

読書費

★読書費はだいたい月四、五千円に止めているが、読みたいなと思う本はみな千円以上である。学生諸クンのように百貨店の書籍部でドッかと床に腰をおろしてのタダ読みもできない。P47の拙文中の竹久夢二著の「凧」を何十年かぶりでページを繰っていたら、ある頁に蚊が圧死していた。夏か秋のはじめごろにこれを読んでいて、本を伏せたとき、運の悪い蚊がとびこんできたのであろうか。それはともかく、この「凧」ほか何冊がまとめて古本屋で七、八円で買ったのだが、その頃、月給日には日ごろの前借で一銭玉一つ貰えなかったため、その日も十円前借しての帰りだった。帰宅したら愚妻が「電気代や水道代はどうするの？」と言った。しまったと思い、買ってきたばかりの本をまた抱えて、スグ本屋へ売りに走ったところ「勉強して買うときまっせ」と恩に着せながら、六円たらずより呉れなかった。古本屋って、ボロイ商売だナと思ったことである。その後、前借したとき、また「凧」をあらためて買いもどしたのだがもう四十年も前のことである。—あの蚊も四十年間、ぼくの本箱の隅で安置されていたことになる。

夏こそ頑張ろう

★汗っかきのぼく、今でこそダラシがないが、若いころは、みんながヘバる夏にはウンと頑張ったものである。先輩に追いつき追い越すのは皆がダウンする夏を狙うべきである。

（不二田一三夫）

▼葉子コーナー

▼ハイキングやピクニック等に行ってよく雨にあう事がありますが、北海道では蕗が傘の役をしてくれます。葉が傘位に大きく、大雨の時など三本ほどを重ね合わせてインスタント傘となります。子供の頃三本で傘にしましたら、茎が小さな両手に重く感じながらさしていたのを思い出します。

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十年六月二十五日 印刷
昭和五十年七月一日 発行（毎月一日発行）
川柳塔 重巻五七八号

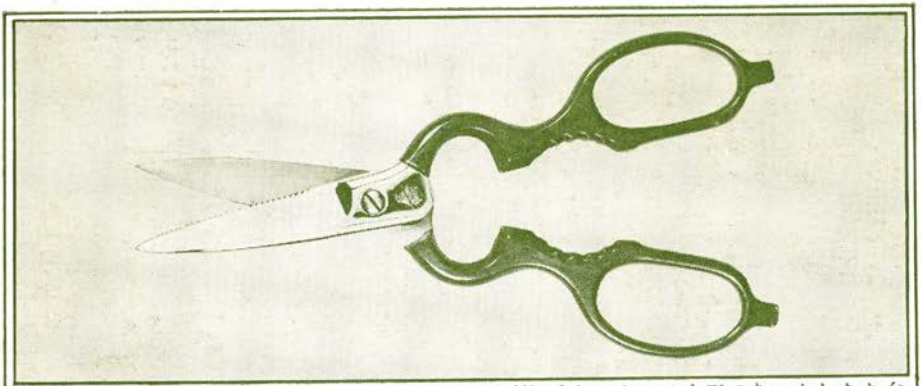
製造・販売サントリー株式会社

（サントリー謹製）

上等の夜を約束する
上等のワイン。

金曜日はワインを買う日。

Suntory サントリーシャトーリオン〈赤・白〉1,500円●中瓶800円



お台所の新兵器

ヘンケル万能バサミは、アイデアをいかしたお台所の新兵器。カニ、スルメなどの干もの料理から、栓ぬき、ふたあけなどにも使えます。
世界100ケ国の人々に愛用されている人形印のヘンケル刃物を、あなた自身でおたしかめください。

ヘンケルの刃物は百貨店・スーパーマーケット有名刃物店でお求めください。

J.A.HENCKELS
ZWILLINGSWERK AG
SOLINGEN/GERMANY
日本ヘンケル㈱
神戸・東京

川柳塔 七月号

定価 三百円（送料十六円）